

発行日 2021年1月18日

2020 年度 日本学生オリエンテーリング選手権大会 ロング・ディスタンス競技部門 報告書



開 催 日	2020年(令和2年) 10月18日(日)
開 催 地	栃木県矢板市
競技会場	栃木県県民の森
主 催	日本学生オリエンテーリング連盟 栃木県オリエンテーリング協会
主 管	2020年度日本学生オリエンテーリング選手権大会 ロング・ディスタンス競技部門実行委員会
共 催	一般社団法人大学スポーツ協会(令和2年度スポーツ庁補助事業)
後 援	矢板市 矢板市教育委員会 公益社団法人日本オリエンテーリング協会
協 賛	株式会社日本旅行 株式会社ニチレイ 有限会社ヤマカワオーエンタープライズ 株式会社フォルテ 一般社団法人奥三河高原アウトドア協会 株式会社壮関



目次

<資料>

ご挨拶

日本学生オリエンテーリング連盟会長
河合 利幸



コロナ禍の中、諸事情によりスプリント競技の同時開催を断念せざるを得なかったとはいえ、ロング競技だけでも開催することができて、本当によかったと思います。春インカレに続き、秋も中止となっていたら、インカレと学連の今後に大きな影響を与えることになったことでしょう。開催決定後の短い準備期間の中で、様々な感染予防策の実施など初めてのことが多く、例年以上に準備が大変だったであろうことは想像に難くありません。日本学連の役員やインカレ実行委員会、栃木県オリエンテーリング協会の皆様のご尽力、そして矢板市をはじめ、地元関係者の皆様のご協力には感謝しかありません。

今回のインカレで特筆すべきことは、なんといっても初のライブ配信でしょう。併設大会なし、観客なしというインカレ史上においては特殊な事情、それに参加できなかった学生に配慮してということだったと思いますが、GPSトラッキングやテレイン内からの実況映像を含めて、レースの面白さ、臨場感を伝えるに十分な役割を果たしていました。ライブ配信を観た観客の1人としては、男子選手権で優勝した小牧選手の圧倒的な強さや、女子選手権優勝の伊部選手を含めたライバルたちの接戦など、純粋に楽しむことができましたが、機材の確保を含めた準備の大変さを考えると、頭が下がります。

この原稿は感染拡大が止まらない1月初めに書いていますが、3月のインカレが開催できるよう、現役学生の皆さんには改めて自分たちにできること、すなわち感染拡大防止策の徹底をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、未曾有の事態の中、準備に当たっていただいた実行委員会とその関係者の皆さんに改めて感謝いたします。栃木県及び矢板市の地元関係者の皆様には、様々な面でご指導ご協力をいただきました。主催者の日本学連を代表して、厚く御礼を申し上げます。

日本学生オリエンテーリング連盟幹事長
谷野 文史



守れなかったインカレミドルの悔しさから半年、インカレロングを守ることができたこと、幹事長として一選手として嬉しく思います。

今回のインカレロングが開催されるまで様々な戦いがありました。まず、日本学生オリエンテーリング連盟では、開催に向け様々な議論を連日オンラインで行いました。このような社会情勢の中果たしてインカレを開催してよいのだろうか、開催するにしても全校参加できないことが予想されるがそれをインカレとしてよいのだろうか…本当に心苦しい議論が続きました次に、実行委員会の皆様です。我々の開催していただきたいという要望に応じていただき、たくさんの準備をしていただきました。前例のない、感染症対策、映像配信化、スタート時間の調整、自動音声によるスタート方式…様々な創意工夫をしていただいたおかげで、感染リスクの低い状況を作っていただき、無事開催していただきました。そして最後に、各校のみなさんです。大学と出場に向け交渉をし続けていただいたおかげで、多くの大学の方に参加していただきました。まさに、学生のみなさんも運営者の皆様も一丸となって守ったインカレロングとなりました。

大会当日も、この日に向けてトレーニングを積んできた全国の選手たちの熱い戦いが繰り広げられ、例年通り、例年以上の素晴らしい大会であったと、私は感じました。

最後になりましたが、私たちの活動を認めてくださり、このような厳しい社会情勢のなかであっても開催を許可していただいた、矢板市の皆様本当にありがとうございました。



コロナ禍の中、関係者のたゆみない努力によって何とかインカレロング2020が開催できたことにほっと胸をなでおろしています。当日は、無観客試合という制限が課されましたが、その逆境を跳ね返すような素晴らしい演出とライブ配信を実現させた実行委員会の皆さまには大きな敬意を表します。私も見ていて感動いたしました。

このトレインは過去にO-Mapが作成されたことが無い完全Newマップで、矢板の里山群とは違った良い植生に恵まれており、当協会にとって秘蔵のトレインでした。全域が県有林であり、まだ拡張の可能性を残しております。最初のお披露目としてインカレ誘致に動いたわけですが、無観客試合ということで学生さん以外は残念ながら参加していただくことができませんでした。そこでより多くの方、あらゆる年齢層の方がこの地にまた集える次の機会として2021年のCC7の開催申し入れを受託しております。来年10月にまたこの場所でお会い致しましょう。そして将来に渡って魅力的な大会を誘致できるよう、トレイン開拓に当協会は努めていきます。

さて、ここで2つのデータを掲げておきます。

1)2020 年都道府県魅力度ランキング

今年の最下位は例年の茨城県に代わり栃木県

<https://diamond.jp/articles/-/250981?page=3>

2)オリエンテリング全国大会（9 大会）都道府県開催数ランキング

<https://www.facebook.com/groups/155338484615478/permalink/1900467150102594/>

当然のようにダントツで栃木県での開催が一番多い訳であります。尚、インカレ4種目だけ、全日本大会だけでランキングをとっても、栃木県は単独首位であります。そして練習トレインとしても数多くのトレインを擁しております。

オリエンティアにとって、最も魅力ある県は間違いなく1)のデータとは相反して「栃木県」であるわけですね。今後もトレイン開拓・ビッグ大会誘致に動いていきますので、コロナが落ち着いたらまたどうぞ当県を訪れていただくよう、そして当県の既存トレインでたくさん練習していただくよう、お誘い申し上げて挨拶と致します。

挑戦的なイベントを仕掛けてみたい方も、是非当協会までご相談下さい。地元涉外に長けた者が色々アドバイスをさせていただきます。

1

競技結果

1.1 選手権の部

ME(1/2)		出走者数62	
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	小牧弘季	筑波大学4	1:16:34
2	朝間玲羽	東京大学3	1:21:54
3	平岡丈	京都大学2	1:22:00
4	太田知也	京都大学4	1:23:09
5	二俣真	京都大学2	1:23:41
6	大石洋輔	早稲田大学4	1:24:02
7	江野弘太郎	慶應義塾大学4	1:24:52
8	津田卓磨	横浜国立大学4	1:27:00
9	金子哲士	東北大学4	1:27:20
10	伊藤元春	東京大学3	1:28:02
11	清水嘉人	北海道大学3	1:30:17
12	宮嶋哲矢	千葉大学4	1:30:50
13	伊藤頌太	慶應義塾大学3	1:31:53
14	住吉将英	名古屋大学4	1:32:07
15	谷野文史	筑波大学4	1:33:47
16	永山遼真	筑波大学2	1:34:19
17	高木一人	北海道大学2	1:34:28
18	嶋崎渉	東北大学4	1:35:07
19	羽田拓真	横浜国立大学2	1:36:16
20	祖父江有祐	筑波大学2	1:36:23
21	高橋英人	一橋大学4	1:37:10
22	和佐田祥太郎	京都大学3	1:37:11
23	片岡佑太	大阪大学4	1:37:33
24	古池将樹	京都大学4	1:37:42
25	阿部遼太郎	横浜市立大学3	1:37:47
26	棚橋一樹	名古屋大学4	1:38:35
27	森倭渡	北海道大学3	1:39:40
28	今野陽一	東北大学3	1:40:10
29	野口晃太郎	北海道大学3	1:40:42
30	保刈優	東北大学4	1:40:47
31	名雪青葉	筑波大学3	1:41:23
32	石川創也	名古屋大学4	1:42:26
33	倉地草太	北海道大学4	1:43:03
34	藺部駿太	東北大学4	1:43:08
35	竹下晴山	茨城大学3	1:44:24
36	石崎建	金沢大学4	1:44:56
37	伊藤良介	京都大学3	1:45:58
37	豊田健登	茨城大学4	1:45:58
39	小寺義伸	東京工業大学4	1:46:27
40	本庄祐一	東京大学2	1:47:10
41	五十嵐央人	金沢大学4	1:47:23
42	山田基生	東北大学4	1:47:26
43	鈴木京佑	横浜市立大学4	1:49:09
44	櫻井一樹	東京工業大学4	1:49:48
45	根本啓介	筑波大学2	1:50:03
46	菅沼友仁	茨城大学4	1:51:00
47	栗生啓介	名古屋大学3	1:51:02
48	唐木朋也	東北大学4	1:52:28
49	丸山ゆう	京都大学4	1:55:19
50	宮川靖弥	東京工業大学3	1:55:52
51	田中琉偉	法政大学3	1:58:29

ME結果は右上に続く

ME(2/2) 左下の続き			
順位	氏名	学校・学年	タイム
52	鈴木琢也	横浜国立大学3	1:59:01
53	石渡望	東北大学4	1:59:23
54	谷平光一	名古屋大学4	1:59:27
55	高橋洸太	東京工業大学4	2:00:49
56	和田佳丈	静岡大学3	2:03:31
57	小林直登	名古屋大学2	2:04:07
58	山内優太	広島大学4	2:04:17
	清水慎太郎	広島大学4	2:33:35
	本田明良	静岡大学4	DISQ
	池田匠	早稲田大学3	DISQ
	小林尚暉	東京大学3	DISQ

WE		出走者数35	
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	伊部琴美	名古屋大学4	1:03:19
2	阿部悠	実践女子大学3	1:03:33
3	宮本和奏	筑波大学4	1:04:58
4	世良史佳	立教大学4	1:06:50
5	香取瑞穂	立教大学4	1:09:32
6	小林祐子	東北大学4	1:11:35
7	大栗由希	茨城大学3	1:12:35
8	永山尚佳	神戸大学3	1:12:57
9	清野幸	横浜国立大学4	1:13:47
10	近藤花保	名古屋大学2	1:14:29
11	長瀬麻里子	お茶の水女子大学2	1:16:17
12	今井里奈	椋山女学園大学2	1:16:19
13	栗山ももこ	横浜市立大学2	1:16:20
14	片岡茅悠	東京大学4	1:17:21
15	須本みずほ	椋山女学園大学3	1:17:28
16	山根萌加	京都大学3	1:17:30
17	上島じゅ菜	お茶の水女子大学2	1:18:00
18	中神智香	静岡大学3	1:18:30
19	菊池美結	岩手大学3	1:21:23
20	松田千果	横浜市立大学4	1:23:42
21	藤井春菜	北海道大学2	1:24:31
22	秋山美玲	早稲田大学4	1:24:35
23	明神紀子	聖心女子大学3	1:28:32
24	岩崎佑美	慶應義塾大学3	1:30:15
25	富永万由	早稲田大学4	1:30:51
26	八木橋まい	東北大学4	1:31:30
27	高橋茉莉奈	大阪大学2	1:31:35
28	井上千帆里	相模女子大学4	1:33:29
29	多田明加	金沢大学3	1:36:02
30	菊地美里	東北大学2	1:39:24
31	松本萌恵	神戸大学2	1:39:37
32	山崎璃果	椋山女学園大学3	1:42:33
33	土田千聖	名古屋大学3	1:49:55
34	猪股紗如	千葉大学2	1:58:00
	五十嵐羽奏	名古屋大学3	DISQ

MUL1 出走者数45			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	平岩伊武季	筑波大学2	0:46:53
2	堀内颯介	茨城大学2	0:47:26
3	鈴木遼賀	岩手大学2	0:48:49
4	豊澤義文	東京工業大学4	0:49:03
5	中嶋律起	横浜国立大学4	0:50:16
6	小林亮太	岩手県立大学4	0:51:31
7	根岸健仁	一橋大学2	0:52:17
8	岩田慈樹	京都大学3	0:53:50
9	佐藤佑亮	東京大学2	0:54:12
10	村井智哉	東北大学2	0:54:18
11	市川礼偉	横浜市立大学3	0:54:41
12	京屋陽介	名古屋大学3	0:55:12
13	大槻賢二郎	東北大学3	0:55:40
14	浴本悠貴	神戸大学2	0:55:51
15	山崎嘉津人	東京工業大学2	0:56:10
16	萱尾澄人	大阪大学3	0:56:51
17	衣笠匠斗	東京大学2	0:57:22
18	村田温基	東北大学3	0:58:36
19	得能渉	千葉大学4	1:01:03
20	小森直人	芝浦工業大学2	1:01:23
21	犬山瑛斗	北海道大学2	1:04:19
22	柿沼晴喜	筑波大学4	1:04:39
23	相馬哲兵	東京大学2	1:05:00
24	坂本健悟	東北大学4	1:05:54
25	青木航流	東京工業大学3	1:08:07
26	網優希	早稲田大学2	1:08:12
27	川端将也	大阪大学2	1:08:33
28	竹花佳祐	東北大学3	1:11:52
29	川崎拓巳	東京理科大学2	1:12:56
30	笹部龍仁	京都大学3	1:14:01
31	中田成央	東京農工大学3	1:14:44
32	林昇吾	関東学院大学3	1:18:20
33	水野渉吾	静岡大学3	1:18:39
34	長井翔太郎	京都大学2	1:20:42
35	川西翔貴	東北大学2	1:23:25
36	板垣星哉	慶應義塾大学2	1:23:43
37	橋本大佳	福島大学3	1:24:45
38	水流尚樹	千葉大学4	1:29:29
39	森川輔	千葉大学2	1:31:06
40	高木大誠	金沢大学2	1:31:18
41	新井宇宙	早稲田大学3	1:34:18
42	竹安宏曜	東京大学2	1:52:33
43	石井洋一郎	東京大学2	1:54:37
	瀬田龍之介	金沢大学4	2:04:36
	森谷恵吾	北海道大学3	DISQ

MUL2 出走者数46			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	田淵ヒカル	慶應義塾大学3	0:41:06
2	稲毛隆太	東北大学2	0:42:25
3	吉田薪史	大阪大学4	0:43:03
4	堀江直人	東北大学4	0:44:48
5	箕浦皓	京都大学3	0:47:06
5	山田峻大	東北大学3	0:47:06
7	末満寛太	北海道大学2	0:48:22
8	福留悠斗	金沢大学4	0:49:06
9	藤原悠平	東京大学3	0:49:49
10	根岸龍宏	筑波大学2	0:50:20
11	伊藤嵩真	東京大学3	0:53:09
12	高野陽平	神戸大学4	0:53:11
13	伊藤拓馬	東北大学4	0:53:40
14	有澤達哉	東京大学3	0:54:34
15	徳地研人	京都大学4	0:55:18
16	佐藤隆	東京工業大学2	0:55:59
16	原柊斗	岩手大学3	0:55:59
18	中野海斗	神戸大学2	0:56:45
19	竹重拓輝	大阪大学3	0:57:03
20	野沢星雅	茨城大学4	0:57:34
21	若月俊宏	東京工業大学3	0:58:59
22	安齋音哉	東京農工大学3	0:59:01
23	富安蓮	北海道大学2	0:59:16
24	烏野祐作	東京大学2	1:00:28
25	前川光鷹	東京理科大学3	1:00:52
26	菅野裕貴	横浜市立大学4	1:01:54
27	本多一成	千葉大学4	1:02:19
28	矢田祐喜	静岡大学3	1:02:33
29	竹山翔悟	早稲田大学3	1:02:39
30	藤澤康	東北大学2	1:02:53
31	森恒大	筑波大学3	1:04:27
32	大石征裕	東京農工大学大学院3	1:05:25
33	上保望	早稲田大学3	1:06:13
34	西原大貴	東北大学2	1:08:11
35	栗山朋大	横浜国立大学2	1:09:07
36	菅野正太	福島大学4	1:11:47
37	松井俊樹	静岡大学2	1:12:54
38	松井泰道	早稲田大学3	1:13:36
39	長南光紀	福島大学3	1:17:25
40	速水駿	名古屋大学3	1:18:02
41	嶋崎彰人	関東学院大学2	1:18:24
42	瀧井健介	東京工業大学3	1:23:21
43	濱崎大暉	金沢大学3	1:36:18
44	吉田玄	千葉大学2	1:42:44
	大久保壮途	東京大学2	DISQ
	大西諒哉	千葉大学2	DISQ

MUL3 出走者数45			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	寺田直加	東北大学3	0:45:18
2	加藤千晴	東北大学3	0:46:39
3	小林哲郎	東北大学3	0:50:22
4	菅波崇志	筑波大学2	0:50:53
5	篠原幹博	京都大学4	0:51:15
6	立松空	早稲田大学2	0:52:13
7	池田直樹	東京大学4	0:52:33
8	櫻木嵩斗	東京工業大学4	0:52:58
9	伊地知淳	千葉大学3	0:54:42
10	村田千真	筑波大学3	0:54:54
11	三浦開登	東京工業大学4	0:55:32
12	西田直人	茨城大学3	0:55:52
13	笠井虹汰	千葉大学3	0:56:55
14	西浦裕	東京大学3	0:57:18
15	石渡雄也	関東学院大学3	0:58:13
15	藤井悠輝	名古屋大学3	0:58:13
17	葛西裕樹	東北大学2	0:58:58
18	稲島一真	金沢大学4	0:59:05
19	高野智也	東北大学4	1:00:03
20	井上匠梧	京都大学2	1:00:17
21	磯邊岳晃	千葉大学4	1:00:46
22	用松知樹	慶應義塾大学2	1:03:22
23	柏田芳樹	一橋大学4	1:03:29
24	板橋侑樹	東京農工大学4	1:03:31
25	吉仲瑞貴	京都大学2	1:03:32
26	藤本紘哉	北海道大学3	1:04:05
27	金城和志	大阪大学4	1:04:18
28	波根竣介	東北大学2	1:04:29
29	大鶴啓介	東京大学4	1:05:08
30	佐野良我	慶應義塾大学2	1:05:57
31	武田信悟	北海道大学2	1:10:18
32	河野隼司	東京大学3	1:11:15
33	小田隼士	東京農工大学3	1:11:42
34	豊田俊哉	神戸大学3	1:13:23
35	井土宙	静岡大学2	1:14:13
36	井坂将隆	東北大学3	1:14:42
37	木本琢登	早稲田大学3	1:22:59
38	竹市葵	群馬大学2	1:30:21
39	脇田耀介	東京大学2	1:30:35
40	木村陸人	金沢大学2	1:32:31
41	福田拓亮	東京工業大学3	1:33:26
	大川将司	横浜国立大学2	2:00:48
	星彩斗	福島大学2	DISQ
	森田邦夫	静岡大学3	DISQ
	澤田直志	早稲田大学2	DISQ

MUL4 出走者数47			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	渡邊寛希	筑波大学大学院4	0:40:26
2	小林俊介	東北大学3	0:45:55
3	倉田瞭一	東京工業大学3	0:47:02
4	古閑駿介	東北大学3	0:47:25
5	小林伸次	東北大学3	0:47:27
6	谷遼太郎	大阪大学2	0:48:00
7	生田峻	関東学院大学4	0:49:43
8	岡本哲史	京都大学3	0:50:39
9	浴歩輝	東京工業大学4	0:51:13
10	藤澤達也	東京大学2	0:51:43
11	荒川悠人	東京農工大学3	0:52:27
12	西平楽	東北大学4	0:52:35
13	根本夏林	東京大学4	0:53:56
14	楊泓志	横浜国立大学2	0:54:01
15	高橋直道	東北大学3	0:54:17
16	上田皓一朗	立命館大学2	0:56:24
17	清水有希	金沢大学4	0:57:48
18	森山凌佑	千葉大学4	1:00:07
19	高柳知朗	筑波大学4	1:00:51
20	岡田航太郎	東京理科大学2	1:00:53
21	野村峻太	北海道大学3	1:01:17
22	松嶋亮弥	東京大学3	1:01:23
23	イルマズ恵明	京都大学2	1:01:55
24	塚田翔太	東京工業大学2	1:02:06
25	岩佐一大	千葉大学4	1:02:39
26	宮岡竜也	早稲田大学2	1:02:59
27	松本明訓	東京大学4	1:03:31
28	向井悠真	京都大学2	1:03:56
29	石田健太郎	早稲田大学4	1:04:08
30	脇田晃秀	名古屋大学3	1:04:39
31	高松暉	筑波大学2	1:05:53
32	河野駿介	静岡大学2	1:06:17
33	森下晃成	静岡大学3	1:08:38
34	笹島建吾	茨城大学3	1:08:45
35	杉村天	神戸大学2	1:09:14
36	富沢隆成	群馬大学3	1:11:04
37	松本諒	福島大学4	1:11:16
38	伊藤隼太郎	東京農工大学3	1:13:36
39	仲長航	一橋大学2	1:14:55
40	中林優樹	慶應義塾大学2	1:16:36
41	到津春樹	茨城大学4	1:19:35
42	大西肇	北海道大学2	1:20:06
43	君島健太	東北大学2	1:22:23
44	萩原宏哉	東北大学2	1:23:54
45	田頭樹	慶應義塾大学2	1:27:13
46	小池翔馬	金沢大学2	1:39:31
47	中村諒	早稲田大学3	1:52:10

WUL 出走者数41			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	佐久間若菜	筑波大学4	0:40:27
2	田村一紗	横浜市立大学4	0:42:59
3	鈴木日菜	実践女子大学3	0:47:45
4	山賀千尋	大阪大学3	0:48:10
5	阿部朱莉	東京理科大学3	0:48:11
6	池ヶ谷みのり	一橋大学3	0:48:24
7	明田彩里	椙山女学園大学3	0:48:46
8	武石瑞季	岩手大学2	0:50:22
9	太田伊代香	北海道大学2	0:50:23
10	榎戸麻衣	日本女子大学2	0:51:05
11	小林璃衣紗	青山学院大学3	0:51:15
12	佐藤珠穂	法政大学4	0:51:28
13	三浦快嶺	福島大学4	0:51:34
14	重岡慧実	京都大学2	0:52:20
15	金子詩乃	日本女子大学4	0:52:25
16	溝渕賀子	神戸大学2	0:53:17
17	坂巻朱里	十文字学園女子大学2	0:54:20
18	佐藤美那子	横浜国立大学3	0:54:30
19	鈴木春音	名古屋大学3	0:54:32
20	藤井明日香	関東学院大学3	0:54:57
21	崎原美咲紀	千葉大学2	0:55:20
22	砥石真奈	東京農工大学4	0:55:38
23	藤田奈津美	奈良女子大学3	0:55:40
24	菅原真優	日本女子大学4	0:56:04
25	坂根歩実	実践女子大学2	0:59:09
26	松本環	早稲田大学3	0:59:48
27	刈谷まりい	椙山女学園大学4	1:01:37
28	大塚彩加	北海道大学2	1:02:15
29	西谷彩奈	筑波大学大学院4	1:02:50
30	小笠原萌	奈良女子大学4	1:03:09
31	泉山実和奈	神戸大学2	1:04:01
32	藤平歩	実践女子大学4	1:04:08
33	加藤涼子	慶應義塾大学2	1:05:25
34	稲辺穂乃香	東京農工大学4	1:06:05
35	駒崎成美	神戸大学2	1:06:16
36	楊馨逸	早稲田大学4	1:19:30
37	安藤瑠乃	椙山女学園大学4	1:20:55
38	志村紫保	東京大学3	1:21:47
39	矢倉美励	千葉大学2	1:22:34
40	三上夏生	横浜国立大学2	1:37:21
	富山詩央里	実践女子大学3	DISQ

MUS 出走者数46			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	龍堀巧	東北大学4	0:28:53
2	石森晃	東北大学4	0:29:14
3	石川諒	東北大学2	0:32:25
4	小丸幸佑	京都大学3	0:33:58
5	山田大雅	中央大学4	0:34:07
6	桑山陽次	東北大学2	0:35:12
7	櫻井千尋	名古屋大学2	0:35:15
8	後庵野大輔	東北大学3	0:35:38
9	千葉滉平	東北大学3	0:36:19
10	浅田雄一	名古屋大学3	0:38:03
11	椿原暖人	名古屋大学2	0:38:05
12	舟木大河	東北大学2	0:38:49
13	時任晴央	東北大学2	0:38:51
14	飯田晟樹	名古屋大学4	0:40:05
15	金澤晴樹	京都大学3	0:40:32
16	田牧将馬	名古屋大学4	0:41:04
17	大森総司	名古屋大学4	0:41:42
18	木村詠吉	東京工業大学2	0:42:41
19	大場隆太郎	東京工業大学3	0:43:12
20	井上祐人	名古屋大学4	0:43:50
21	枝澤勇太	京都大学3	0:44:14
22	村上淳哉	名古屋大学4	0:44:28
23	大友将樹	東京工業大学2	0:44:57
24	吉川辰也	名古屋大学2	0:46:52
25	長野那由多	東京工業大学2	0:47:24
26	戸塚務	東北大学4	0:48:45
27	鈴木璃土	筑波大学2	0:49:12
28	村中結希	京都大学3	0:49:20
29	豊永雄郎	京都大学4	0:49:23
30	牧島滉平	広島大学2	0:49:38
31	松本皐佑	名古屋大学2	0:51:48
32	大友秀太	東京工業大学2	0:53:08
33	野田聡	東京工業大学2	0:54:08
34	岩崎雄也	名古屋大学2	0:58:00
35	坂野公紀	静岡大学2	0:58:32
36	早坂鴻志	東北大学2	0:58:33
37	井口大雅	広島大学2	0:58:51
38	阿保匠真	東北大学2	1:02:48
39	細野祐	群馬大学2	1:04:19
40	小川誠人	静岡大学2	1:06:50
41	藤田宏貴	名古屋大学2	1:08:23
42	日比浩喜	東京大学4	1:12:24
43	木村宇快	東京工業大学2	1:17:34
44	細川敦司	静岡大学3	1:20:40
45	鈴木海斗	名古屋大学2	1:44:24
	河野弘士	東京工業大学2	DISQ

WUS 出走者数31			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	水上玲奈	東北大学2	0:32:37
2	松本芽依	横浜市立大学2	0:34:41
3	佐藤隆奈	筑波大学2	0:35:20
4	小久保茉優	立命館大学2	0:35:21
5	高野玲奈	横浜市立大学2	0:38:51
6	宇佐美綾野	宮城学院女子大学2	0:43:04
7	佐藤汐子	宮城学院女子大学4	0:44:26
8	木村瑠月	東北大学4	0:45:15
9	久住結香	東北大学4	0:45:25
10	高倉玲衣	宮城学院女子大学3	0:46:31
11	横山由奈	東北大学3	0:48:11
12	野口珠希	筑波大学3	0:50:02
13	住谷遥	日本女子大学2	0:52:28
14	中川和音	日本女子大学2	0:55:27
15	佐々木亜珠	宮城学院女子大学3	0:55:28
16	佐藤可菜	宮城学院女子大学4	0:55:29
17	佐藤加奈	立教大学3	1:00:40
18	久米明日香	神戸大学2	1:01:35
19	久保田愛	日本女子大学2	1:03:36
20	中村莉子	宮城学院女子大学3	1:05:54
21	初野春菜	実践女子大学2	1:07:56
22	門松歩美	立教大学3	1:08:21
23	工藤藍花	十文字学園女子大学2	1:10:43
24	杉山桃菜	十文字学園女子大学4	1:17:52
25	栗本美緒	津田塾大学4	1:18:28
26	植村日向	椋山女学園大学3	1:21:46
27	中井愛実	奈良女子大学2	1:23:13
28	杉浦野乃子	椋山女学園大学2	1:24:48
29	仲田有沙	実践女子大学2	1:26:41
	神谷梨央	椋山女学園大学2	DISQ
	藤中美波	日本女子大学2	DISQ

MUF 出走者数18			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	金子隼人	東京大学1	0:27:11
2	高橋忠大	東北大学1	0:32:13
3	村山蒼悟	岩手大学1	0:38:50
4	山田凌平	岩手大学1	0:47:11
5	徳力雅哉	立命館大学1	0:48:13
6	山内颯大	立命館大学1	0:49:43
7	満田壮晴	大阪大学1	0:52:13
8	岩崎隼也	岩手大学1	0:55:54
9	清水嘉之	神戸大学1	0:56:23
10	浅井蓮	静岡大学1	0:59:29
11	浦部健二	慶應義塾大学1	1:01:23
12	池田馨	神戸大学1	1:10:57
13	松久侑生	立命館大学1	1:14:23
14	高井遥貴	静岡大学1	1:27:31
15	今井悠	慶應義塾大学1	1:40:03
	倉上英	慶應義塾大学1	DISQ
	飯田健太	神戸大学1	DISQ
	橋本遼佑	神戸工業高等専門学校1	DISQ

WUF 出走者数8			
順位	氏名	学校・学年	タイム
1	吉田菜々子	東京理科大学1	0:24:55
2	林里美	大阪大学1	0:32:54
3	高野澄佳	大阪大学1	0:34:10
4	佐藤頌子	大阪大学1	0:34:12
5	澤木彩	大阪大学1	0:42:52
6	福田有紗	国際基督教大学1	0:52:25
7	栈敷優輝	神戸松蔭女子学院1	0:55:40
8	石井ゆみ	大阪大学1	1:02:38

2 入賞者コメント

2.1 男子選手権

優勝 小牧 弘季（筑波4）

新型コロナウイルスの影響で2月に春インカレ延期が決まり、延期先の5月も中止になりました。それどころか、いつオリエンテーリングができるのかさえ分からない日々が始まりました。その時点でインカレロングのことを考えるのは難しいことでした。もう気持ちはどん底でした。4年間心血注いできたものが奪われてしまい、自分が失われてしまったような感覚に襲われました。それでも僕がトレーニングを続けることができたのはいつかあるはずの大きな舞台で活躍することを夢見続けたこと、それから筑波の仲間やライバル選手たちのおかげです。悲しいことが多い今年度でしたが、オリエンテーリングをあきらめないでよかったと思っています。

今回のインカレロングはまさに夢の舞台でした。実況や中継といった演出面の充実には選手としても度肝を抜かれましたし、いつもの応援がないにもかかわらず会場はすばらしい一体感がありました。とはいえレースは大変厳しいものでした。序盤ペースが上がらない上にミスを重ね、苦しい展開になってしまいます。いつもならそれでも余裕があったかもしれませんがライバル選手たちはそれを許してくれませんでした。ビジュアルで負けていることを知り、リスクを冒してペースを上げることに決めました。それは身体的に相当つらく、ここまで苦しいとインカレは勝てないのか、優勝を甘く見ていたんじゃないか、とレース中にもかかわらず自嘲気味な気分になりました。それでもフィニッシュ直前に時計を見て優勝をほぼ確信し、ゴールすることができました。理想のレースには遠いですが勝負にきっちり勝ったということ、全力を出し切ったということ、そして苦しい時期のなかで優勝できたということに満足しています。

気づけばインカレはあと3レースしかありません。僕はすべて優勝するつもりです。妥協はしません。最後まで早くなろうともがき続けると思います。筑波大学としても最高のチームになっていきたいですね。そんな我々を楽しみに待っていてください！

最後に運営の皆様、筑波大のみんな、そのほか大勢の支えてくださる皆様、本当にありがとうございました。

準優勝 朝間 玲羽（東京3）

準優勝を目標として準備してきました。そしてひとまずはそれが達成できたことにほっとしています。

自分はとても怪我をしやすいたちで2019年の3月ごろから怪我を断続的に繰り返し、2020年の1月からは走ることにすら厳しくなり6月ごろまでその状況が続きました。しかし幸せなことに多くの方々がサポートをしてくださったこともあり治療と体づくりに専念することができ、また新型コロナウイルス流行の状況下でみなが等しくオリエンテーリングができない状況であったことも幸いし、大きな焦りに身を潰されることなくインカレへの闘志を燃やし続けることができました。体力レベルも落ち、時間もない中でしたが自分なりの最大限の準備ができていたので当日は自信をもってチャレンジすることができました。

上との差は大きく、またこれから伸びてくるであろう選手たちもたくさんいます。そのような素晴らしい環境に感謝しながら、上を目指してこれからも頑張っていきます。次は胸を張って優勝を目標にできるように帰ってきます。

会場の雰囲気や実況と中継の質の高さなどやはりインカレは特別な舞台でした。自身としても非常にワクワクするインカレを楽しむことができました。応援してくださった皆様ありがとうございました。

3位 平岡 丈(京都2)

インカレの選手権という舞台が初めてで緊張しているのかもわからないようなふわふわした感じでスタートラインに立ちました。このレースに向けては長め、登り多めのトレーニングを積んできて体調的にも万全な状態で入ることができました。多少ミスしても巡行で引っ張っていくことが今の自分にとっての最善であると思っていたのでそういったイメージを作っていました。その通りになって、レース中は集中しながらも落ち着いてレースを運ぶことができ、普通にミスをしていましたがまあいつも通りだくらい感じで行くことができました。これから修正しなければならない部分も多いけど、逆にまだ直していける部分が見えているというのがうれしく思います。今回はあまり期待も注目もされていなくて自分のレースに集中することができたけれど、これからは少なくとも今回より注目も期待もされると思うしその中でもしっかり結果を残していかなければならないので、また強くなってこの場に戻ってきたいと思います。そして、今ここまで成長してこられたのはこの自由には活動できず難しい期間であったにも関わらずいろいろ動いてくれたり、今回も声を上げて応援をしてくれたりといったように数えきれないほど多くの部分で支えてくれたチームのおかげであるので、感謝するとともに、自分のことだけでなく何かチームのためにできることはないかと常に考えながら今後過ごしていきたいなと思います。

4位 太田 知也(京都4)

まず、開催して下さった運営者の方々、インカレに参加するために尽力してくれたり、応援してくれた部員、OBOGの方々には心から感謝しています。ありがとうございました。

得意なロングで満足のいくレースと結果を出すことが出来て非常にうれしく思いますし、絶対に立てるはずがないと思っていた頃もあった場所に今回立つことができてなんだか不思議な気持ちでもあります。

振り返ってみて、自分は誰かに勝つことよりも自身が成長することをモチベーションに頑張ってきたように感じていて、それで結果が不調な時でも折れることなく頑張り続けられていたのが、4年目でやっと結果につながってくれたのかなと思います。

インカレ前の2か月間は夏バテのせいかうまく走ることが出来ず、2週間前くらいにようやく何とかかなりそうな状態になりはしましたが、本番で力を出し切れるか非常に不安になっていました。本番ではちゃんと走ることができて良かったです。最初は後ろの有力選手が気になったりもしましたが、予想地図やコースの作製などの対策をたくさんやってこれたおかげか、それからは非常に冷静な状態で集中して走ることが出来ました。メインのロングレグもしっかりルート選択して自信をもって走ることができました(遅かったです)。

まだまだオリエンテーリングをする上で未熟な点は多くありますし、さらに成長してインカレ残り3つの全てのレースに全力で、そして楽しんで臨んでいきたいと思います。

5 位 二俣 真（京都2）

3月頃からコロナウイルスの影響によりオリエンが出来なくなりました。逆にチャンスだと思いました。多くの人が十分なトレを積めないと思ったからこそ、毎日しっかりと走り、読図走やトレランも積極的に取り入れました。全く先の見えない状況で淡々とトレを積めたのは非常によかったと考えています。7月頃から少しずつ大会に出場できるようになりました。しばらくはぱっとしない結果が続きましたが夏の終わり頃から少しずつよい結果が出るようになりました。インカレ入賞を目標にしたのはその頃からです。少しずつ目標が高くなっていきとても楽しい時期でした。インカレロングの要項が出て、またチャンスだと思いました。距離 8.9km, アップ 600m というタフなコースだったからです。もしかしたら小牧選手といい勝負ができるかもしれない、とも考えるようになりました。ちょっと調子に乗っていました。

良くも悪くもいつも通りのレース内容だった、というのがインカレを思い返した感想です。ビジュアルで中間1位という内容が耳に入り、「これは行けるんじゃないか？」と思った直後にミスをしました。その後も1つ大ミスをしてしまいました。1つのレースをしっかりまとめきれない弱さが出てしまったと思います。来年のインカレロングは優勝します。来年も応援よろしくお願いします。

最後になりましたがインカレを開催していただき本当にありがとうございました。とても楽しい1日でした。

6 位 大石 洋輔（早稲田4）

学生にとってインカレは他に置き換えることの出来ない特別な大会だと思います。選手それぞれにとって何がインカレを特別たらしめているのかは異なると思いますが、私は「想いが次の世代に繋がる」という点において特別だと考えております。惜しくもセレに通ることのできなかった選手や一年生などが、エリートを走る選手のインカレにかける熱い思い・インカレに向けた準備過程・当日の走りなどを目の当たりにし、その姿に憧れを抱き、自分も次は絶対にエリートの舞台に立ってやると奮起する、この一連のプロセスはインカレ特有のものではないでしょうか。自分の今回のロングでの走りがそのようなパワーを与えられたかは不明ですが、誰かが少しでも頑張る原動力になっていれば幸いです。

さて今回のインカレは非常に厳しい状況下での開催となりました。それにも関わらず、例年よりも素晴らしい選手権の舞台を用意してくださった実行委員会の方々、開催のために多くのハードルを乗り越えてくれた谷野幹事長、当日多くの応援を送ってくれた OC の現役生、我儘な要求に応えてくれた OC の OB の皆様全員に感謝申し上げます。ありがとうございました。

優勝 伊部 琴美（名古屋4）

まず、インカレロングで優勝できてとてもうれしいです。念願のフォレスト優勝でした。

今年は新型コロナウイルスの影響で、インカレ1か月前まで半年ほど森でのオリエンテーリングが全くできず、出場できるかもわからなくてモチベーションを保つのが難しい状況でした。正直甘えてしまった時期もありました。その中で「出場できた時に後悔しないように」という思いで最低限のトレーニングは続けていました。

東海インカレから再開することができ、1か月間追い込みをかけました。森でのオリエンテーリングをする機会にはできるだけ参加し、ランニングやコンパスワークの練習、ルート検討など今までできなかった分頑張りました。

本番直前は朝から緊張していて気持ちが高まっていた。レースではミスをした箇所もいくつかありましたが、できる精一杯で走り切りました。その結果僅差で勝つことが出来て本当にうれしかったです。今回すばらしいYouTube配信があったこともあって色々な人からお祝いのメッセージも頂き優勝した実感がわきました。

しばらくは優勝して気が緩んでしまいましたが、また気を引き締め引退まで他種目でも優勝できるよう頑張っていきたいです。

最後になりましたが、コロナ渦の状況下で運営を進めてくださった実行委員会の皆様、幹事会を引っ張ってくださった方々、学校と掛け合ってた方々、応援してくださった方々、本当にありがとうございました。感謝してもしきれないです。

準優勝 阿部 悠（実践女子3）

インカレロングではたくさんの応援をありがとうございました。インカレの結果は2位と自分の中で初めての入賞と過去最高順位をとる事が出来ました。去年のインカレロングのレースでは7位と入賞まであと一步でしたが、6位とのタイム差は5分近くあり悔しい思いをしたのでこのような結果を出す事ができてとても嬉しいかったです。

コロナの影響で数ヶ月オリエンテーリングをする機会がありませんでしたが、ここで何もなかったら絶対に4年の先輩方には勝つことができないと思い、4月から100km以上を目標にトレしたり、家の近くの山でトレランしたり、家から赤城のトレインまで何分で行けるかなチャレンジを途中までしたりしました。

4年の先輩方とインカレロングを走ることができるのはこれが最後だったので自分の中では頑張りたいと思う大会でした。また、4月がからトレを頑張ったおかげで走力があがっていたので、今年のインカレロングでは優勝を目指していました。しかし、伊部さんに14秒差で負けてしまったのはとても悔しかったです。あそここのルートチョイスをミスしなければとかもう少し登りを頑張ればと後悔と反省が多いレースでした。目標としていた先輩方に追いつくことができた嬉しさの結果を出すことができた喜びはありますが悔しい気持ちの方が大きかったです。なのでインカレミドルでは優勝を目指して頑張りたいと思います。

3 位 宮本 和奏 (筑波 4)

昨年優勝したことで、今年が学生最後の年ということで、優勝を意識せざる負えない立場にいましたが、3 位という順位を受けて、自分の力不足を実感しました。それでも、3 位になれたのは、応援してくださった皆さんのおかげだと思います。レースでは、ビジュアルを通過してからのレース後半に登りレッグがあり、そこで他の選手との差が開いてしまったように感じますし、集中力が切れアタックが雑になってしまったのも勝てなかった理由の一つであると思います。

昨年の春インカレが中止になって以来、勝つことへの意欲がなくなってしまったこともあり、フィジカル・メンタル面の両方でトレーニングをしていませんでした。7 月ごろから練習会や大会が次第に開催されるようになってから、走るようになりましたが、9 月ごろから膝の痛みがあり、まともに走ることができませんでした。そんな中で、インカレへ向けて部員みんなが盛り上げていこうとしている姿を見て、私も頑張れました。

オリエンテーリングができない期間を経て、やはりオリエンテーリングは楽しいということを実感しました。今回大会の開催に尽力してくださった方々にはとても感謝しています。春インカレが開催されるかはまだ分かりませんが、昨年走れなかった先輩方に恥じないような走りをしたいです。

4 位 世良 史佳 (立教 4)

私は 1 年生の時に参加したインカレスプリント・ロングで、選手権を走る先輩のかっこいい姿に憧れてインカレ病にかかり、オリエンテーリングに競技として向き合うようになりました。

そこからアナリシスを書き始めたり目標を立ててレースに臨んだり、オフィシャルさんをはじめとした多くの方々に支えられながら練習を重ねました。あの時から 3 年後の今、あの憧れの舞台に、しかもシード選手として挑戦させて頂くことが出来るなんて、私を含めて誰も想像できなかったと思います。このように思い入れのある大会が開催され、また入賞できたことを本当に嬉しく思います。

今回のレースを経て、もっとはやいオリエンテーリングができるようになりたいと思いました。序盤は守りのオリエンテーリングをしすぎてしまいスピードが出せず、ロングレッグでは細かい特徴物の処理が上手くいかず、またツボってリロケに自信が持てずうろろうしたりと、大変なことがたくさんありました。今のままではミドルシーズンで上位を狙うことは難しいと思います。そのため、春インカレまでにこれらの課題を克服し、万全な状態で最後のインカレに挑戦させて頂けたら嬉しいなと思います。

最後に、新型コロナウイルスによる大変な状況の中で、こんなにも素晴らしいインカレの舞台を作ってくれた大会関係者の皆様、全ての関わってくれた皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

5 位 香取 瑞穂 (立教 4)

始めに、このような状況の中で素晴らしい舞台を用意して下さった運営者の皆様、インカレ開催の為に尽力下さった日本学連関係者の皆様、関わって下さったすべての皆様、本当にありがとうございます。当日は、無観客ならではの YouTube 配信など目新しいものがあり、レースも応援も全てがとても楽しい1日になりました。

今回、インカレロングへの出場は最後になるにもかかわらず、思っていたよりも準備が出来ずに当日を迎えてしまったので、始まる前は不安でいっぱいでした。しかし、応援して下さいの方の温かい言葉やビジュアルでの応援のおかげで、今の自分の全力を出して走り切ることが出来ました。レースではロングレグでのルートミスや、小さなミスがありましたが、現在地ロスト等の大きなミスをする事なくレースをまとめられたことは嬉しかったです。今大会では改めて周りの方々の温かさを感じ、恵まれた環境にいるなと感じました。応援して下さいの方々、支えて下さった方々本当にありがとうございます。

これからは次のインカレに向けて、不安なく当日を迎えられるように、そして悔いのない走りが出れるようにしっかり準備をしていきたいと思います。

6 位 小林 祐子 (東北 4)

去年のインカレロングで3位になった時から、次のインカレでは絶対に優勝したいと思っていました。しかし、コロナが流行ってしまいミドルが中止になり、その後部活動自体ができなくなり、気持ちがオリエンから離れていきました。当初の予定では部活動が再開するのが最速でもインカレの1週間前とかで、8月の時点では今回のインカレは出れないものだと思っていました。しかし、部内の執行部の方たちが頑張ってくれたおかげで、予定より早く部活を再開することができ、インカレも出れることになりました。

せっかく出れるなら優勝したいと思い、優勝を目標に掲げていましたが、正直優勝どころか入賞できる自信もありませんでした。自分がオリエンできない間たくさん大会に出てる人もいるし、自分なんか元が下手くそだから絶対下手になってるし、そもそも15000の地図でレースをするの1年ぶりだし、前日も不安で全然眠れませんでした。

そして結果は6位。よくわからないルートを選んで何度も現ロス。次のインカレではたくさん練習して絶対に優勝しよう、と思いました。

しかし、次のインカレが本当に開催されるかは分かりません。レース中もっと冷静になって良いルートを選んでいればこんな結果にはならなかったと思います。どんな状況でも、今できる最大限のレースをすることが大事だと気付きました。応援して下さいの方々や、開催して下さいの方々に、本当に申し訳ない気持ちです。

3.1 コース設定にあたって

1. 広い会場の活用

今回使用した会場である栃木県県民の森全国育樹祭会場跡地は、実行委員会メンバーで下見に訪れた際にその広さと適度な傾斜に心を奪われ、真っ先に会場として用いることが決まった。ゴールやビジュアルとして用いることはもちろん、どうにか会場を通りうるルートチョイスが生まれるコース設定を行った。結果的に男女ともに最長のロングレグのベストルートが会場を突っ切るコース設定となった。

2. スタート地区について

スタート地区の栃木県県民の森全国植樹祭会場跡地についても会場である栃木県県民の森全国育樹祭会場跡地と同様、下見の際に真っ先にここを使用する案が上げられた。全体の地図が出来上がるにつれて、正式に今回の場所をスタート地区とすることが確定した。スタートフラッグが目の前にあるプレススタート方式にすることで、インカレという独特の雰囲気の中、始まりからしっかり地図を読んで動き出せるかを試した。今にも走り出したくなるような道が先に続く中、選手権当日は上位選手ほどしっかり立ち止まり、最適なルートを選択して走り出していたように見受けられた。

3. テレインの制約

本テレインである栃木県県民の森はエリアによってさまざまな景色を見せてくれるテレインである。スタート地区付近は伐採道が多く見られる典型的な矢板テレインの様相を残しつつも、非常に走行可能度の高い森が広がっている。また、会場の北側のエリアは足元に笹が生え、岩も随所に点在し八ヶ岳エリアのような高原テレインの様相を見せた。ただ、スタート地区付近と会場付近の間には非常に急峻な沢がいくつも入り込んでおり、これをどう対処させるかが本テレインでコースセットする上で最も大きな制約でありポイントであろう。また会場が比較的高い場所にあることもあり、登距離が大きくなりすぎないように配慮することも制約の一つであった。

4. ロング選手権者を決めるにふさわしいコース

ロング・ディスタンス競技らしく、コントロール位置は平易ながらも、そこに至るまでにいくつも考えられるルートから最適なものを選択し、それを実行することに力点を置いた。また、テレインの制約でもあるが非常に傾斜が急な部分も多々あり、体力的にも十分にロング選手権者を決めるにふさわしいコースとなった。

5. ビジュアル

会場である栃木県県民の森全国育樹祭会場跡地は本大会のビジュアルとしても存分にその真価を発揮した。会場のど真ん中をぶった切る誘導を登り、応援や仲間の視線を背後に集めながら会場を後にする。時間にして1分ほどであるが、走る側も観戦する側もそれ以上に長く感じるビジュアルとなった。

また、選手権コースのビジュアル通過は男女ともにコース全体の50%ほどである。例年はビジュアル通過時で80%程度の設定が多く、残りは会場周りの数コントロールをこなしてフィニッシュという形が多いが、本年は「逆転を信じて後半戦へ」「まだまだ何が起こるかわからない」という形へと持っていった。

3.2 男子選手権 コース解説

△→1

朝間選手が2:48でトップラップ。次いで金子選手(2:54)、太田選手(3:02)となった。プレスタート方式の本大会で、目の前の道走り出したくなる中、冷静に斜めに森を切っていた選手が上位ラップに並んでいる。

1→2

コントロール間の高さ関係を間違えるとやや遠回りになるレッグ。上位ラップは唐木選手で0:56、次いで今野選手(0:57) 鈴木選手(1:00)となった。

2→3

直進が求められるつなぎレッグ。トップラップは田中琉選手で0:49、次いで高橋選手の0:53となった。その後ろは多くの選手が0:55で並んでいる。

3→4

主要道までの森のこなしと、登坂力で差がつくレッグ。トップラップは朝間選手で7:21、次いで平岡選手(7:25)、清水選手(7:46)となった。上位6選手の中では、小牧選手、二俣選手が分タイムのミスタイムを計上している。

4→5

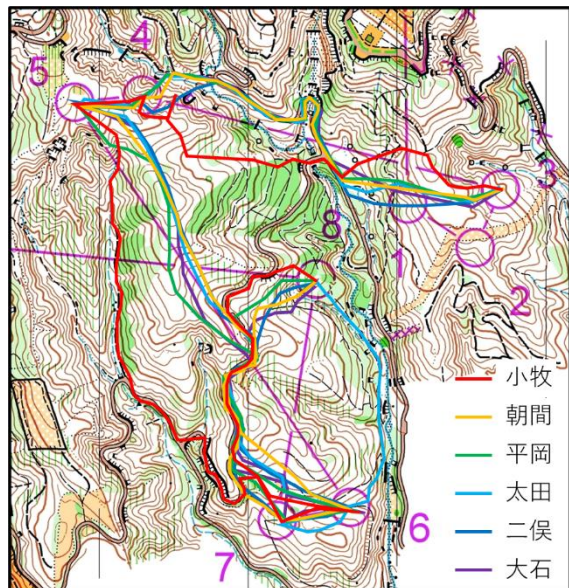
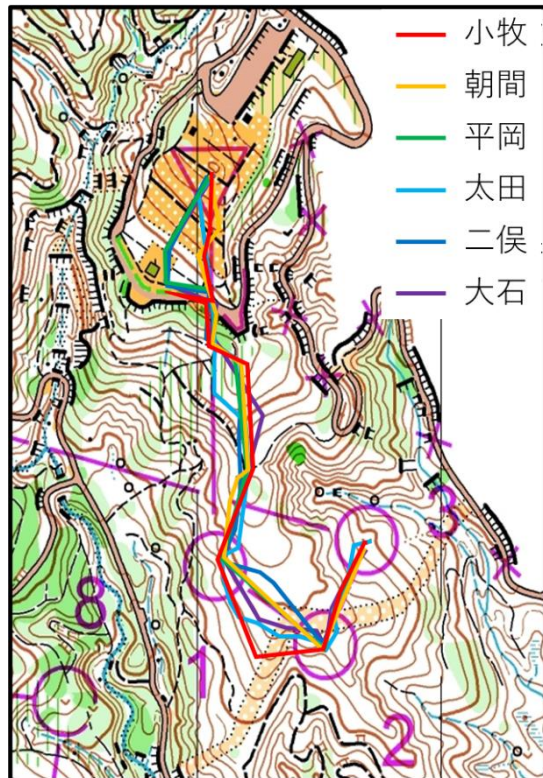
最初のロングレッグ前のつなぎレッグ。登り後のさわやかな森の中を駆け抜ける。トップラップは二俣選手で1:00、次いで小牧選手(1:03)、住吉選手(1:06)となった。

5→6

最初のロングレッグ。尾根をつたって緩やかな沢を下って主要道に出るルートが最速想定。トップラップは太田選手で5:56、次いで江野選手、津田選手(5:58)となった。小牧選手は入賞者の中で唯一沢底ルートを選択したが、シンプルなナビゲーションとアタックの簡単さで6位ラップをたたき出している。平岡選手は最初の脱出でのミスで1分ほどミスタイムを計上している。唐木選手は5番コントロールまでで3位の快走であったが、このレッグでのミスタイムを皮切りに入賞戦線から離脱していった。

6→7

つなぎレッグ。方向を定めてまっすぐ走る。最速は阿部選手で0:58、次いで小牧選手、高木選手(1:01)となった。



7→8

ルートチョイスとしては左、右が存在するが、主要道を長く走ることのできる左が速い。トップラップは二俣選手で 4:04、次いで平岡選手（4:23）、小牧選手（4:35）となった。入賞者の中で唯一右ルートを選択した太田選手はここで 1 分 20 秒近くミスタイムを計上している。

第一中間

8 番コントロールまでが男子選手権の部の第一中間である。

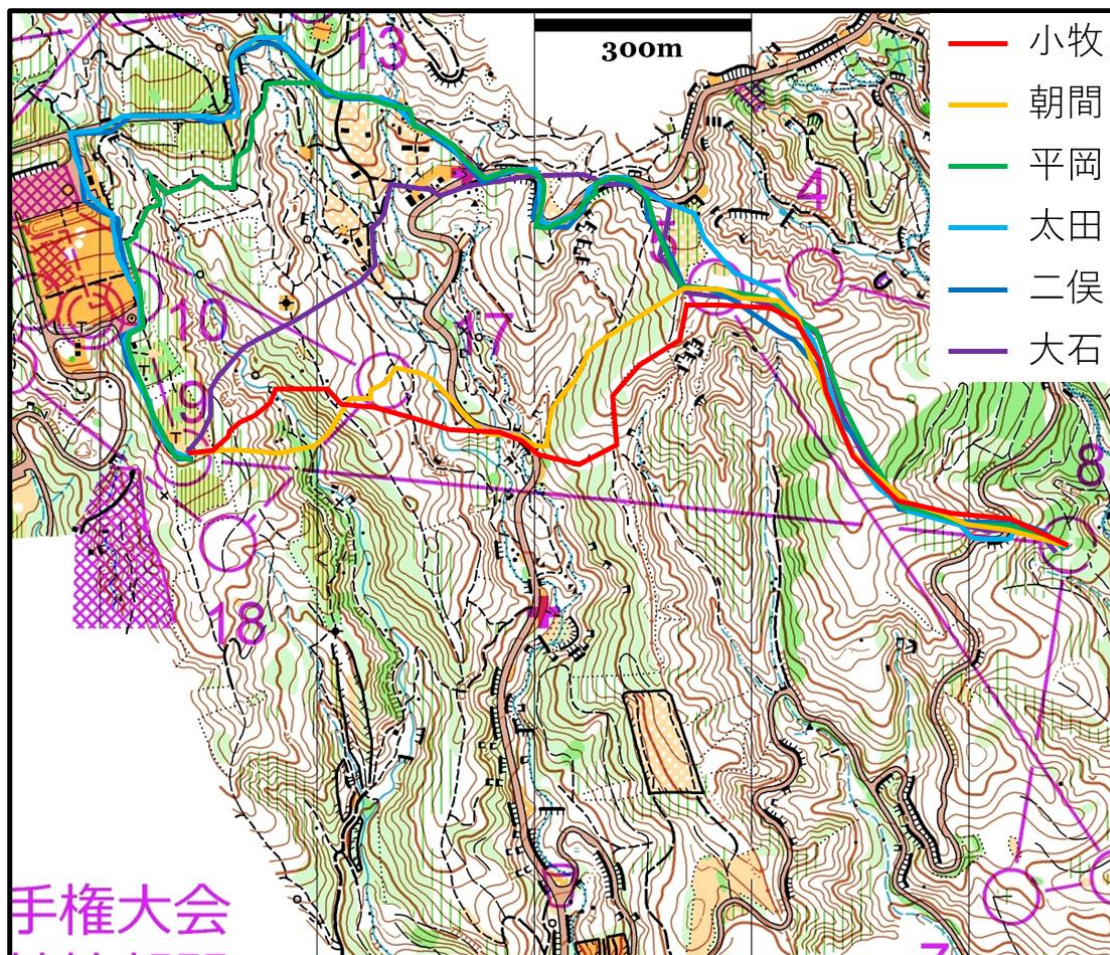
ここまでの積算タイムで上位 6 人をおさらいすると右のようになる。

入賞選手が上位を占める中、序盤の山塊はスロースタートであった津田選手が 5→6、7→8 での好ラップにより 6 位につけている。

名前	積算タイム
朝間選手	25:49
二俣選手	26:44
小牧選手	27:25
平岡選手	27:29
太田選手	27:51
津田選手	28:05

8→9

男子選手権のレースで最も長いロングレッグ。入賞者の中でもルートが分かれた。最速は会場を通るルートを選択した二俣選手で 13:15、次いで平岡選手（13:43）、小牧選手（14:08）となった。プランナー想定ルートは二俣選手のルートで、同様のチョイスを行った太田選手も 15:24 で 5 位ラップにつけている。6 位ラップの大石選手は主要道の細かな曲がりも直線的に進むなどテクニカルにタイムを稼ぎ 15:29 となった。同じようなレッグ線に沿うような直線的なチョイスを行った小牧、朝間の両選手であるが、コントロール手前の深い沢のこなしでタイム差がついたように見受けられる。8 番コントロールまでで 2 位と 1 分差をつける快走を見せていた朝間選手は、このレッグで二俣選手と 3 分近く詰められ 4 位となった。



第二中間

9 番コントロールは男子選手権における第二中間である。ロングレグをこなして順位がどう入れ替わったかについて右図に示した。

名前	積算タイム	第一中間からの順位変動
二俣選手	39:59	➡+1
平岡選手	41:12	➡+2
小牧選手	41:33	➡
朝間選手	41:50	➡-3
太田選手	43:15	➡
大石選手	43:41	➡+3
江野選手	43:58	➡+4

二俣選手がロングレグの快走により 2 位以下を 1 分以上引き離し、プランナー想定 of 40 分を上回る唯一の 30 分台をマークした。

また、大石選手がロングレグを 6 位ラップでこなし、全体でも 6 位に食い込んできている。また、7 位の江野選手が 6 位の大石選手と 16 秒差と肉薄している。

9→10

ビジュアルまでのつなぎレグ。ロングレグの勢いそのままに二俣選手が 1:04 でトップラップ、次いで小牧選手 (1:08)、谷野選手 (1:09) となった。

10→11

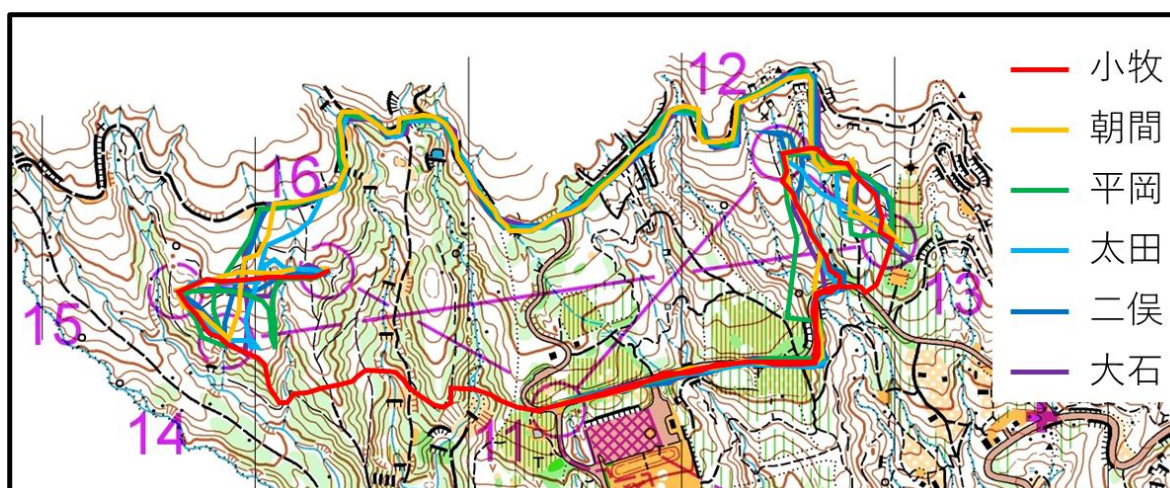
会場のだ真ん中を通過するビジュアルレグ。広いながらも地味に傾斜のある芝生の上を駆け抜ける。こちらでも二俣選手が 1:31 で 7→8 から 4 レグ連続でトップラップをマークした。次いで住吉選手 (1:32)、高木選手 (1:38) と続いている。応援の力を走りに変えて選手は後半戦へと脚を進めていく。優勝した小牧選手はビジュアルで自らがトップでないことを悟り、ギアを入れ替えたというコメントを残している。

11→12

主要道をしばらく走った後、不整地の登りが続くレグ。ここは小牧選手が 3:45 でトップラップ、次いで江野選手 (3:54)、太田選手 (4:14) となった。江野選手はこのレグで大石選手を上回り、6 位に順位を上げている。二俣選手はコントロール付近でロストし、3 分近いミスタイムを計上している。このレグで小牧選手はついに 1 位となった。

12→13

小径に脱出し、それをできるだけ引き付けてからアタックをするルートが最速想定。トップラップは清水選手で 1:37、次いで菌部選手 (1:47)、高橋選手 (1:52) となった。入賞選手の中では小牧選手が 1:56 で 5 位ラップをマークしている。



13→14

ビジュアル後最初のロングレグ。プランナー想定ルートは入賞者のうち5人の選手が選択した北回りルートであるが、トップラップは想定ルートではない選択をした小牧選手で8:23であった。小牧選手のルートは11番コントロール付近までは主要道を走ることができるが、コントロールに近づくにつれ険しい登りが待ち構えているルートである。ビジュアルで1位でないことを察し、「ギアを上げた」とされる小牧選手が勝負をかけた攻めのルートチョイスであった。太田選手は最後のアタックでミスをし、1分のミス。一時的に6位に順位を落としている。

14→15

つなぎレグ。トップラップは二俣選手で0:40、次いで清水選手（0:41）、平岡選手（0:42）となった。

第三中間

15番コントロールは男子選手権第三中間のラジコンが置かれているコントロールである。

ここでのタイムと第二中間からの順位変動を右に示す。

小牧選手がプランナーも想定していない怒涛の追い上げを見せ、60分を切るタイムで1位に。入賞争いも熾烈を極め、5位大石選手から7位江野選手まではわずか22秒となっている。

名前	積算タイム	第二中間からの順位変動
小牧選手	59:16	▲ +2
平岡選手	60:36	→
二俣選手	60:46	▼ -2
朝間選手	61:34	→
大石選手	63:42	▲ +1
太田選手	63:58	▼ -1
江野選手	64:04	→

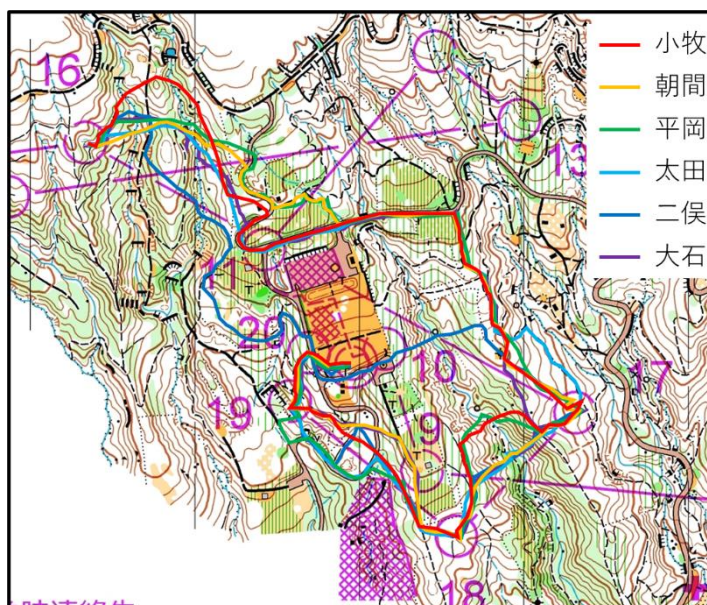
15→16

こちらもつなぎレグであるが、少々ミドルテイストな要素を含んだレグとなった。高さを見誤ると別の沢に落ち込んでしまい登り返しとなる。トップラップは小牧選手で1:38、次いで阿部選手（1:52）、清水選手（1:54）となった。小牧選手の速さが際立つ。

平岡選手はこのレグで2:40ものミスタイムをたたき出し一気に優勝戦線から脱落してしまったものの、入賞圏内で踏みとどまった。

16-17

最後のロングレグ。下り基調でスピードが出る。プランナー想定ルートは細かい差はあれども朝間選手、平岡選手、太田選手がとった鞍部に向けて脱出するルートであった。ここでのトップラップは太田選手で7:23、次いで清水選手（7:59）、平岡選手（8:04）となった。このレグで平岡選手、太田選手はわずかに抜け出し、入賞への道を確実なものにした。一方で、二俣選手は3:24ものミスタイムをたたき出し優勝戦線から脱落し、入賞争いに。小牧選手はミスルートながらも4位レグでこなし優勝へ一直線。入賞者の順位を決定づけるレグとなった。



7位の江野選手は6位の大石選手に6秒差と、最も入賞争いが熾烈な時間帯となった。

17→18

会場付近に戻ってくるために深い沢を切るレッグ。最終盤で厳しい登坂が求められ、フィジカルの強さが如実に現われた。トップラップは小牧選手で 3:38、次いで高木選手（4:10）、大石選手（4:13）となった。

18→19

最終盤で短いながらもチョイスが求められるレッグ。プランナー想定は小牧選手のルートで、トップラップは小牧選手の 2:48、次いで平岡選手（2:59）、羽田選手（3:11）となった。

19→20

会場までの最後の登坂レッグ。残りの力を振り絞ってどこまで走れたであろうか。トップラップは小牧選手で 0:50、次いで棚橋選手（1:00）、高木選手（1:04）となった。小牧選手はこのレッグ単体で巡航速度 86 をたたき出し、一人だけ異次元の走りをしている。

20→◎

ラスポゴール。トップラップはラスポゴールに定評のある名雪選手で 0:17、次いで江野選手、小牧選手が 1 秒差で続いた。

総括

序盤は東京大学朝間選手がハイペースな走りを見せリードする。次いで、レースの中で最も長いロングレッグで好走した京都大学の二俣選手が、想定タイムを上回る走りでビジュアルに現れた。ただ、ビジュアル後の小牧選手の怒涛の追い上げにより、終わってみれば二位に 5 分以上もの差をつけて小牧選手の圧勝となった。また、入賞争いをする順位変動も大きく、一つのレッグのミスが大きく順位を左右する展開となった。

3.3 女子選手権 コース解説

△→1

スタートでしっかり地図を読んで最短距離で森を切れるかどうか。入賞者の中では4名が斜めに走り出していた。トップラップは宮本選手で2:06、次いで小林選手（2:09）、須本選手（2:11）と続いた。

1→2

爽快な尾根走りでスピードが出るレッグ。スピードが出る中で、広い尾根を2番コントロールの方向に正しく行けるかどうか。トップラップは香取選手で2:08、次いで宮本選手（2:10）、阿部選手（2:13）と続いた。伊部選手はこのレッグで3分ミスをしたとき、序盤は苦戦を強いられる。

2→3

つなぎレッグ。オープンに流されず直進できるかどうか。トップラップは片岡選手で0:57、次いで宮本選手（1:01）、阿部選手（1:02）と続いた。

3→4

主要道までの森を最短距離でいかにシンプルこなすかが求められた。トップラップは小林選手で4:30、次いで多田選手（4:50）、近藤選手（4:53）と続いた。阿部選手は主要道までのこなしで2分近くのスライムを計上している。

第一中間

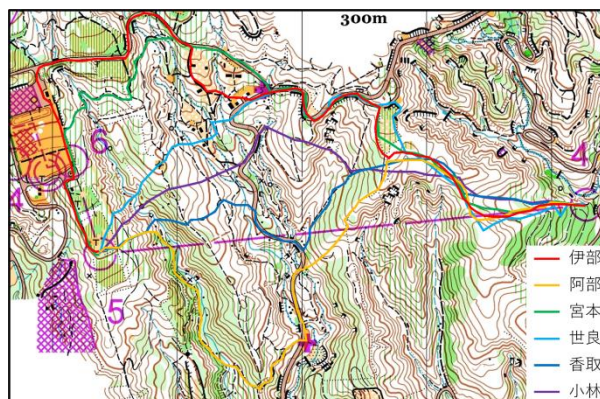
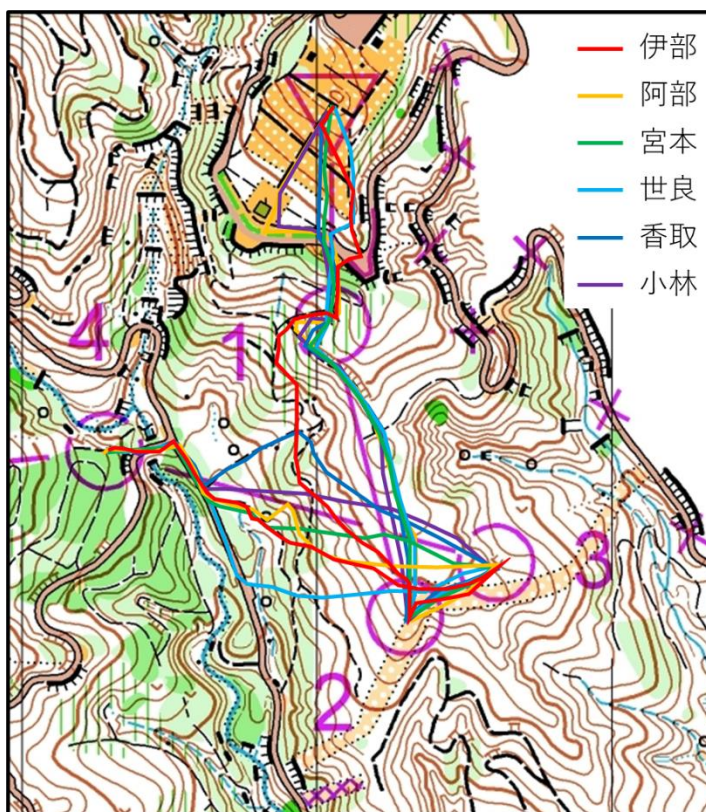
4番コントロールは女子選手権における第一中間である。ここまでの積算タイムと順位を右にて示す。

序盤ということもあり入賞ラインは大きな差はないが、小林選手、宮本選手が一歩リードしている。

名前	積算タイム
小林選手	10:02
宮本選手	10:25
香取選手	10:57
平岡選手	10:59
岩崎選手	11:02
津田選手	11:03

4→5

女子選手権での勝負レッグ。男子選手権にも引けを取らない長さのレッグとなった。プランナー想定は伊部選手の会場を通るルート。トップラップは伊部選手で13:47と他の選手を圧倒する快走を見せた。次いで宮本選手（16:17）、近藤選手（16:31）と続いた。入賞した選手の間でもルートが完全に分かれており、伊部選手と世良選手の差は6分半近くにもなった。



第二中間

5番コントロールは女子選手権第二中間のラジコンが置かれているコントロールである。

ロングレグを終えての積算タイムと第一中間からの順位変動を下記にて示す。

混戦状態の第一中間から大きな順位変動が起きている。特に伊部選手は圧倒的なタイムでトップラップをたたき出し、序盤の遅れを取り戻す21人抜きを見せた。序盤の早い時間帯でスタートした近藤選手、須本選手、大栗選手も上位に食い込んでいる。

名前	積算タイム	第二中間からの順位変動
宮本選手	26:42	➡ +1
伊部選手	27:07	➡ +21
近藤選手	27:30	➡ +1
小林選手	28:23	➡ -3
須本選手	29:27	➡ +5
阿部選手	29:34	➡ +8
大栗選手	30:10	➡ +5

5→6

ビジュアルコントロールへのつなぎレグ。トップラップは世良選手で1:19、次いで近藤選手、松本選手（1:22）と続いた。

6→7

会場のど真ん中をぶった切るテープ誘導を含むビジュアルレグ。トップラップは伊部選手と世良選手で2:00、次いで松本選手（2:03）となった。見た目よりもキツイ登坂であるが、会場の応援を受け力強く駆け抜けていった選手が印象的である。

7→8

ビジュアル後の最初のレグ。トップラップは伊部選手で4:46、次いで松本選手（4:56）、宮本選手（5:36）となった。入賞者の間でもルートが分かれたが、どのルートにおいても大きな違いはなく、自分がスピードを出して走り続けられるルート選択が瞬時にできたかが問われた。

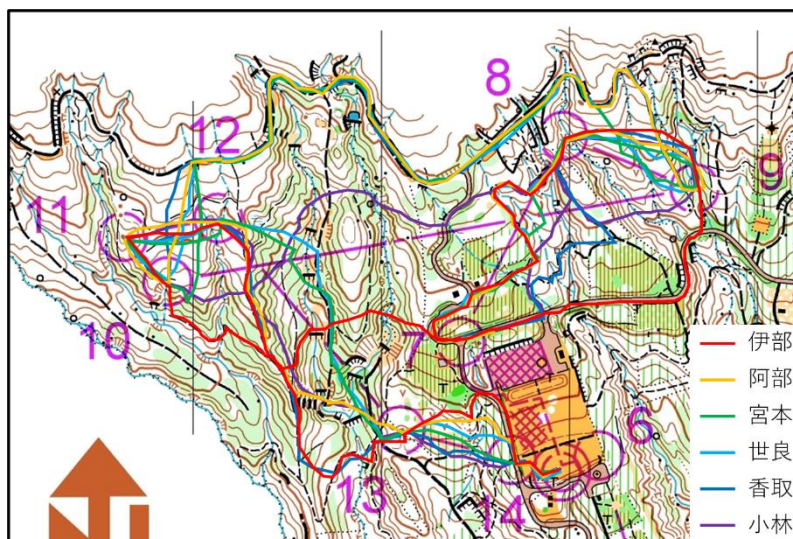
8→9

さわやかな斜面の下りを駆け抜けるレグ。トップラップは宮本選手で3:07、次いで永山選手（3:10）、阿部選手（3:12）となった。コントロール位置単体では少々難易度は高いが、コントロールのある沢に最短距離で入れるかがカギとなる。上の方からエイミングオフ気味に沢に入るとなるとややタイムはかさむが、このレグで大ミスをしたくない保険としては悪くない選択であろう。

9→10

女子選手権の2つ目のロングレグ。トップラップは世良選手で10:15、次いで阿部選手（10:36）、香取選手（11:51）となった。

想定ルートは9番コントロールから北に脱出し主要道を走るルートである。世良選手・阿部選手・香取選手はいずれもこの想定ルートを選択し、好タイムをマークした。伊部選手は南の主要道に脱出し、山塊をいくつか切るルートで2分半のミスタイム。小林選手は真ん中のルートを選択し4分半以上ものミスタイムを計上し、一時入賞ラインを割る順位となった。また、9番コントロールまで3位と好走を見せていた近藤選手はこのレグでのミスタイムにより入賞戦線から離脱している。



10→11

ロングレッグ後のつなぎレッグである。トップラップは片岡選手で 0:55、次いで小林選手(0:58)、松田選手(1:02)となった。

第三中間

11 番コントロールは女子選手権の第三中間コントロールである。二つ目のロングレッグを終えての積算タイムと第二中間からの順位変動を示す。

優勝争いは上位 3 選手が 1 分以内にひしめく混戦。世良選手、香取選手がロングレッグでの好走で大きく順位を上げている。入賞争いも熾烈で、6 位小林選手と 7 位大栗選手はこの時点で 1 秒差であった。

名前	積算タイム	第二中間からの 順位変動
伊部選手	53:00	 +1
宮本選手	53:12	 -1
阿部選手	53:50	 +1
世良選手	55:52	 +8
香取選手	57:56	 +3
小林選手	60:30	 -2
大栗選手	60:31	

11→12

走行可能度の高い緩やかな斜面に対して、コンパスを頼りにまっすぐ走るレッグ。トップラップは小林選手で 1:32、次いで阿部選手(1:33)、片岡選手(1:41)となった。このレッグで阿部選手が 2 位に順位を上げる。

12→13

会場に近づく下り基調のレッグ。尾根をたどるか、沢を切って道に出るかのチョイスがある。前者は尾根の離れどころが難しく、後者は沢を 2 回切るところでタイムロスがあり、一長一短ではあるが、想定ルートは尾根ルートであった。トップラップは伊部選手で 5:23、次いで阿部選手(5:26)、宮本選手(5:52)と続く。優勝争いをする選手が上位ラップを独占したが、伊部選手・阿部選手が一步抜け出す形となった。

13→14

会場付近のラストコントロールまで最後の力を振り絞って走るレッグ。トップラップは藪の薄いところをつなぎ、うまく小径をつないだ阿部選手で 2:22、次いで世良選手(2:24)、小林選手(2:30)となった。

14→◎

ラストゴール。トップラップは伊部選手、片岡選手で 0:20 となった。

総括

女子選手権も男子選手権と同様、優勝争い・入賞争いで順位変動が起こるような展開となり、特に二つのロングレッグで好走した選手が一気に順位を上げた。

4 番コントロールまでの序盤は宮本選手、小林選手、香取選手が一步リードを奪った。迎える最初のロングレッグでは、序盤で出遅れていた伊部選手が圧倒的なタイムをたたき出し一気に 2 位まで順位を上げる。続く二つ目のロングレッグでは世良選手が入賞圏内へと押し上げる走りを見せそのまま 4 位に。阿部選手は終盤の追い上げで伊部選手とのタイムをじわじわつめるも、2 位となった。宮本選手は終始安定した走りを見せ 3 位に。

4 大会運営報告

運営設定者	桑 潤哉
競技責任者	松尾 怜治
会計責任者	堀江 優貴

4.1 大会開催の経緯

4.1.1 開催地・日程の決定

日本学連副会長も務める（有）ヤマカワオーエンタープライズ（以下、YMOE 社）山川克則氏の提案により、栃木県オリエンテERING協会（以下、栃木県協会）によるフランチャイズ形式での開催が当初より検討されていた。スプリント競技部門をときわ走林会の主管で開催することで調整が進んだため、ロング・ディスタンス競技部門の実動部隊となるロング実行委員会の発足を待つ状態となる。4.1.2.項記載の経緯で 2020 年 2 月中にロング実行委員会が発足し、トレイン渉外の末、3 月中には両競技部門とも開催地が確定した。大会開催日については、スプリント競技部門のトレイン候補、日光ろまんちっく村の使用可能日程から 10/17,18 に決定した。

7 月にスプリント競技部門の開催見送りが決まり、結果的にロング単日開催となったものの、日程変更を繰り返すことはコロナ禍においては相当の運営負担となると考えられた。このため「現行日程(10/18)での開催か中止かの 2 択で動く」という当初の県協会の運営指針に従い、10/18 でのロング開催に向けたスケジュールで運営準備を行った。コロナ禍での運営指針、ロング開催判断については 4.1.4 項を参照のこと。

4.1.2 ロング実行委員会の発足

2020 年 1 月に山川氏より競技責任者 松尾怜治(東京大学 14 年度入学)に対し、実行委員会の発足をご提案いただいた。上記運営体制の説明を受け、運営責任者 桑潤哉(東京大学 14 年度入学)とともに、ロング実行委員会の発足に向けて調整を進めるに至った。栃木県協会のフランチャイズ運営であるため実行委員長には県協会会長が就任したが、実質的には両責任者が実行委員会の骨格を固めた。2 月の山リハリレー前後より役員の招集を開始し、主要役員は概ね 2020 年 4 月までに集結した。地図作成業務・渉外業務・地図印刷業務については YMOE へ業務委託を行った。

昨年度春インカレの中止が決まった 3 月に実行委員会幹部でのキックオフミーティングを行い、このような大会開催が不透明な中でこそ、昨年度の秋インカレ運営における失敗を繰り返さないためにも「競技成立を第一に」という理念を形成するに至った。新型コロナ対策のために奔走したり、最終的にはライブ配信のような新規事業にも取り組むこととなったが、上記理念に基づいた盤石な競技班の布陣のもと、競技系統の準備を抜かりなく進めるよう徹底した。

4.1.3 詳細なトレイン選定

栃木県県民の森は、元々栃木県協会内でトレイン開発の検討が進められていた。インカレ開催およびその後の各種イベント開催を見据え、当トレインで開催するにいたった。

開催にあたり、当該エリアを完全新規トレインとして調査を行うこととなった。調査については YMOE 社へ委託するとともに、版權は栃木県協会となった。

春インカレ 2019 が開催されるはずであった 2020 年 3 月 14 日に下見を行い、トレインの様子や会場、駐車場の位置等を把握するとともにコースの回しを検討するなどし、実現可能であることを確認した。

4.1.4 コロナ禍における大会開催決定までの道のり

本項ではどのような基準を設けて開催判断を行ってきたのか、フランチャイズ運営においてどのように意思決定を進めてきたのかを書き記す。

<県協会の全体方針>

2020年4月の県協会総会にて、運営母体である栃木県協会が全体方針を大まかに固める。

- ・現行日程での開催もしくは中止の二択
- ・要項2の発行及びエントリー開始時期の繰り下げ→日本学連への財政出動依頼

1点目に関しては、昨年度春インカレ運営における経験をもとに山川氏から進言頂いたものである。「延期の方向で再度渉外に動き出したものの、その後延期での開催も中止することが確定した」という当時の経緯もあり、むやみに日程を動かしたところで運営者の負担を増やすばかりであるとの考えであった。延期後の日程でも必ず大会が開ける(=感染症が終息する)保証もなく、現実的な方針であったと言える。

緊急事態宣言が下され、学生の課外活動も制限される中、例年通りの大会運営スケジュールのようには進められないことは明白であった。特に大会へのエントリーについては、開催の見通しがある程度経ってから開始しなければ参加者側も申し込みづらいだろうし、中止となった際の運営側の後処理も懸念される。このような経緯で2点目の方針も確定した。

これら2点については担当理事である木村理事へ早急に共有された。

エントリー開始時期を繰り下げたことで、予算のほとんどを占める大会参加費が手元にない状態で運営を進めざるを得なくなった。しかしながら、地図作成費を始めとした大会準備期間の支出を賄うためには相応の金額が必要である。このため、日本学連に大会準備期間中の資金源として300万円の貸付金を依頼することとなった。結果的に400万円への増額のうえ、融資として併設大会中止・参加者減に伴う減収の補填に充てることとなったが、財政出動の詳細に関しては4.4節を参照頂きたい。

<実行委員会の方針>

基本的には栃木県協会の全体方針に従い、エントリーの具体的な開始時期や締め切りなどの各種期日、期限は実行委員会の実行ベースで決定することに県協会と合意した。そこで4月中にロング、スプリント両実行委員会幹部で運営スケジュールを検討した。目下の議題としては

- ・エントリーの締め切り
- ・選手権出場選手登録期限

をいつまで繰り下げられるか、であった。要項3・スタートリストの作成やゼッケン印刷といった作業の所用時間等から逆算した結果、大会当日2ヶ月前にエントリーを開始し、その後ノンストップで準備を続ければ間に合うだろうという結論に至った。よって、実行委員会で8/15前後にエントリーを開始するか否かの判断(=大会運営の継続判断)を行うことに決定し、運営母体の県協会と日本学連に伝達した。

判断基準については7月中のミーティングで詰めていったが、基本的には国や自治体から移動自粛等の要請が出ていないこと、自治体から大会運営の認可がおりることを運営継続の条件とした。これは裏を返せば、エントリー開始後は移動自粛等の要請が出れば(準備が間に合わなくなるため)即刻大会中止とすることを決めたことにもなる。

<学連との連携について>

7月に入ると、夏休み中の課外活動に関する制限が各大学で通知されるようになった。上記の指針・判断基準は「大会運営ベース」の観点からのものであり、参加者側の事情(=学生が大会に参加できるか)どうかも先行き不透明であった。これに伴い7月中旬頃、各大学の活動状況を集約していた学連幹事とSlackやオンラインミーティングで意見交換を重ねていった。

この際、「学生自治」による意思決定のプロセスを貰った昨年度春インカレの報告書を大いに参

考にさせて頂いた。あくまでも県協会・実行委員会の役割は「選手権大会足りうる場を提供すること」である。その大会をインカレとして開催するか否か、選手権の枠や開催形式など、どんな選手権大会にするかは学生たちが最終的に判断・決定するべきものである。当日スケジュールなどの観点から一部助言・要請を行ったが、上記の考えに従い、日学卒等の特例措置に柔軟に対応した。

また、参加者の事情を踏まえた「インカレ開催判断」として、日本学連の判断基準が設けられた。これは大会のおよそ1ヶ月前である9/15時点で、選手権出場可能人数が一定数を超えた場合、学生選手権大会であるインカレを開催する、という指針のものであった。なお、参加可能か否かの情報は日本学連に集約されていた。

結果的に8/19に栃木県から運営許可があり、9/15時点で参加可能人数が上述の判断基準を満たしたと報告を受け、その後も政府からの自粛要請等もなく無事に大会を開催する運びとなった。詳細な時系列については4.2.2の全般計画も参照されたい。

4.1.5 コロナ禍における特例措置

本項では新型コロナウイルス拡大下におけるインカレ運営において講じた、例年とは異なる措置について簡単にまとめた。今後のインカレがこのような非常事態下におかれなことを願ってやまないが、いざという時に備え、書き記しておく。

- ・ **併設大会中止**

8月の栃木県からの運営認可の際に提示された条件として「無観客試合」というものがあったため、これに従った。

- ・ **チームオフィシャルの帯同を(選手権/一般の部問わず)参加校に認め、オフィシャル登録のないチームサポーターの来場は認めない**

感染症拡大防止策の一環として、学生参加者だけでなく、帯同者の参加情報を管理する必要があると考えた。一方で例年、一般の部参加者のサポートに回るオフィシャルもいたため、4.7項を不適用とし上記措置を講じた。

- ・ **参加費の値下げ、大会後徴収**

4.4節を参照。参加者減を食い止めることと、中止時の業務負担を減らすための措置。

- ・ **当日スケジュールの後ろ倒し**

- ・ **待機所先行公開**

宿泊を伴わない形での参加を推奨するため、例年よりスタート時刻、選手権待機所集合時刻を繰り下げた。また、乗り合わせでの来場を推奨していたため、選手権参加者がまとまって来場できるように事前に待機所の場所を公開した。

- ・ **要項3のWeb公開、紙媒体なし**

作業負担を減らすための措置。

- ・ **感染症対策のガイドライン公開**

- ・ **検温、マスク配布等の当日の感染症対策**

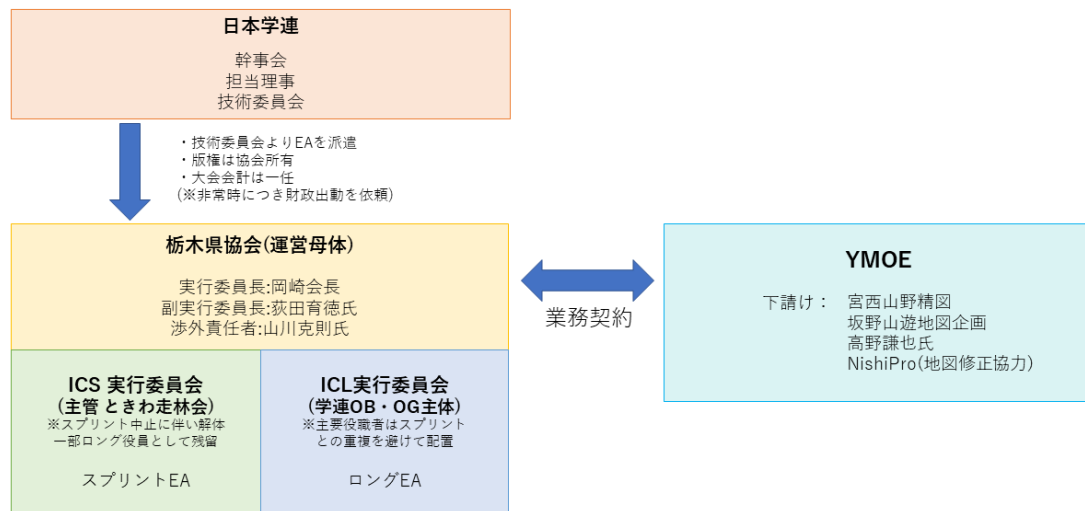
自治体への渉外時にはもちろん、学生が学生課への活動交渉をする際に用いることを想定した新型コロナウイルス対策ガイドラインを公開した。また当日も様々な感染症対策を講じた。

これらについては7章を参照されたい。

4.2 活動実績

4.2.1 運営・組織体制

本大会の運営体制としては、2017 年度以来となる「日本学連と県協会間でのフランチャイズ制」をとっており、日本学連から派遣を受けた大会イベント・アドバイザー(以下、EA)と、栃木県協会の下部組織として発足した実行委員会を実動部隊として大会運営を執り行った。また、一部業務については YMOE へ業務委託を行った。以下に運営体制および職務分担を示す。



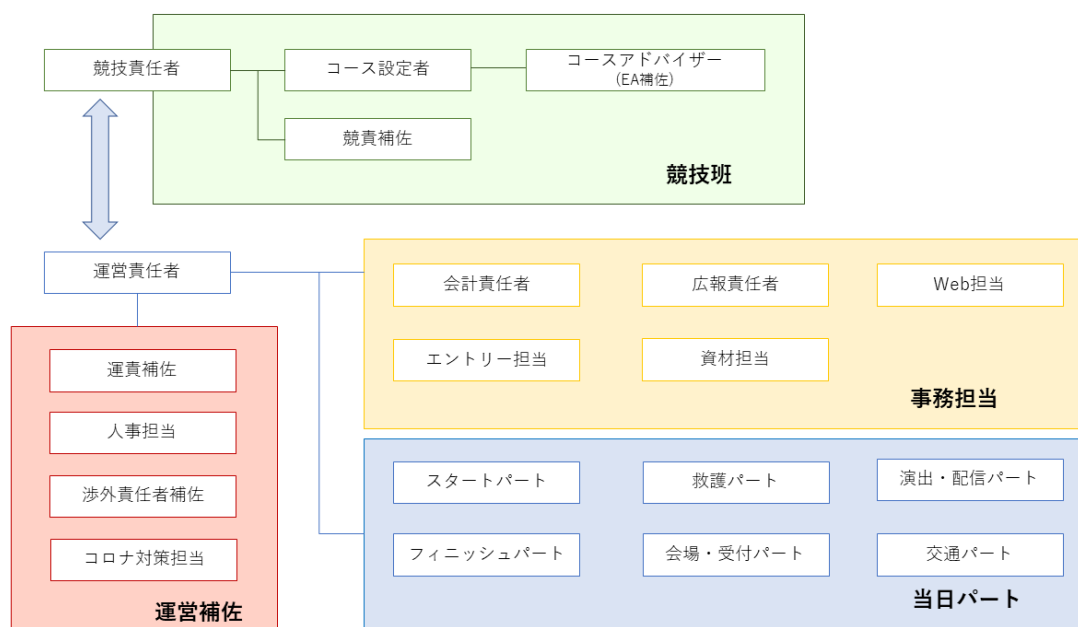
運営体制

- 主催： 日本学生オリエンテーリング連盟、栃木県オリエンテーリング協会
主管： インカレロング実行委員会(県協会役員と関東在住学連 OB・OG を中心に構成)

職務分担

- 実働部隊： 実行委員会、イベント・アドバイザー
地図作製： YMOE (学連外注先)
宮西山野精図・坂野山遊企画・高野氏 (YMOE 下請)、
NishiPro(修正調査を依頼)
各種渉外： 栃木県協会・YMOE

本大会は運営母体が栃木県協会であることから、実行委員長には栃木県協会会長である岡崎氏が就任した。その一方で、大会運営の実務にあたるのは例年同様若手の学連 OB・OG が大勢を占めていたことから、競技責任者に松尾、運営責任者に糸が就任し、両名を筆頭とした組織体制を築く運びとなった。しかしながら、松尾はインカレ運営にて責任者を務めるのは初めてであり、糸も初めてのインカレ運営であった。このため、学連幹事長・JOA 理事を務め、広範な人脈と豊富な運営経験を有する瀬川(東京大学 14 年度入学)を人事担当として発足当初より招聘し、組織内の人員配置に助言を求めた。組織全容を下図に示す。



現行のインカレ規則では、理事会が技術委員会から EA を指名し、実行委員会へ派遣することとなっている。しかしながら当該制度はもはや形骸化しており、本大会の運営でも実行委員会が独自に EA を選定・依頼し、その人事を理事会が承認する(=技術委員として指名する)という措置が取られていた。

当該措置の是非はさておき、競技的ノウハウには比較的明るいメンバーが集まった今回の実行委員会としては、運営全体を広く見渡せ、包括的なアドバイスが可能で、インカレの運営経験が豊富な人物を EA として招聘したいという考えがあった。このため、今回の大会と状況が似通っていた、2016 年度の前高原ロングにおいて実行委員長を務めていた佐藤大樹氏(東京工業大学 11 年度入学)に依頼し、快諾頂いた。

責任者・チーフには、2020 年 3 月時点で実行委員会に加入していた主要メンバーに着任して頂いた。2019 春インカレが中止となり、今後の大会開催の見通しも全く立っていなかった状況で引き受けて頂いたことに、改めてこの場で感謝申し上げたい。インカレ運営が初めてである者や運営経験の浅い者もいたが、過去のインカレでチーフを務めていたなど経験豊富な方にサブチーフ・補佐に入ってもらった。このような組織体制は、若手 OB・OG の運営経験を培うという意味で、今後の継続的なインカレ運営を見据えたものであった。

当初の予定としてはスプリントとの二日間大会であったため、スプリント実行委員会との間で人的リソースをどのように分配するかについては気にかける必要があった。これについては、「基本的には役職者が各実行委員会で重複しないようにし、当日の運営者については両実行委員会で人員共有をする」という方針で実行委員会間の合意が取れていた。とはいえ、特にスプリント運営には独自のノウハウが必要とされるため、2 日間に渡り選手権大会を成立させるにはメンバーを調整しなければならず、人事担当にご尽力頂いた。

結果としてスプリントが中止となり、ときわ走林会・スプリント実行委員会の一部の方にはロング実行委員会のメンバーとして残って頂くこととなった。スプリント競技責任者であった八神遥介氏(東北大学 02 年度入学)に感染症対策チーフに就任して頂いたことは、選手権大会の運営に注力しながらも感染症対策に気を配っていく上で非常に心強かった。

4.2.2 運営の全般計画と実施状況

本大会運営にあたっての全般計画とその実施状況を示す。また、当初の計画から大きな変更を余儀なくされた点や例年とは異なる点を赤字で記載した。

年	月	計画	実施状況・備考
2020	2	実行委員会発足	・ 関東在住の学連 OB・OG に声掛けを開始
	3	0 次下見 EA・重役確定	・ 松尾、桑と下請け業者(宮西氏、坂野氏)でテレイン下見実施。ロング選手権大会に耐えうることを確認。 ・ 佐藤氏が EA に着任。キックオフミーティングを開催し、今後の運営計画について話し合った。
	4	要項 1 公開 会計案策定 主要役員確定	・ 要項 1 公開にさきがけ、栃木県協会幹部に木村理事、松尾、桑を加えたメンバーで、 新型コロナウイルス感染拡大下における運営方針 を固める。 ○現行日程(10/17,18)での開催もしくは中止の二択 ○要項 2 の発行及びエントリー開始時期の繰り下げ →大会準備費用に学連からの財政出動を依頼 ・ 要項 1 公開と同時期に、秋インカレ実行委員会幹部でのオンラインミーティングを開催。参加登録の期限など、運営スケジュールを詰める。 →大会当日 2 ヶ月前を目処に、実行委員会として大会運営の継続判断を行うことを決定。 ・ パートチーフの人員配置がおおよそ確定する。
	5		・ 上記指針を追記した要項 1.1 を公開。 ・ 山川氏の提案により、 学生の参加費を大幅に減額 することに決定。
	6	一次試走	・ スプリント・ロング共に地図完成。 世情を鑑み、北関東在住者・役職者を中心に試走を実施。 試走後、地図調査者に修正箇所を提示し、追加調査を依頼。
		要項 2 公開	・ 例年同様、競技情報・大会のクラス等の情報を開示。 一方で、エントリーは開始せず。要項 3 の広告募集も見送る。 ・ エントリー締め切り、選手権出場選手登録期限の時期等を明文化。
	7	スプリント開催断念	・ 月初めのろまんちっく村への渉外結果を受け、スプリント開催断念。 →8 月頭に要項 2.1 にて情報開示。 ・ スプリント実行委員会解体に伴い、ロング実行委員会の人事を一部再編。また、ロング単独での会計案を策定し直した。 ・ 大会開催判断の基準や、学連との連携の仕方、新型コロナ対策等について、オンラインミーティングや slack にて議論を積み重ねる。 ・ サブチーフの招集を本格的に開始。

	8	実行委員会の 運営継続判断	・栃木県への渉外活動にて、実行委員会の大会開催基準・新型コロナ対策ガイドラインを提示。 ・8月19日付で栃木県より、実行委員会の提示した条件のもとで大会運営の許可が下りる。ただし、運営者・参加者のCOCOAの運用、無観客試合での開催を義務付けられる。 ・要項2.2公開に先立ち、当日の競技スケジュールを詰める。 →選手権を1分間隔スタートとすることで全体のスケジュールを後ろ倒しにし、近郊の大学は宿泊せずとも大会参加が可能となるようにした。
		要項2.2公開	・要項2.2を公開しエントリー、広告募集を開始。新人クラスの参加登録と選手権出場選手登録期限を大会当日のおよそ2週間前まで延長。 ・自治体からの要請に伴い、併設大会を中止。オフィシャルも参加登録制とし、出走する学生およびオフィシャル以外の来場を禁止。 ・感染拡大のために開催中止となった場合に備え、参加費の徴収を大会後に設定。広告掲載費も同様に要項3が発行された場合のみ徴収することを明記。 ・参加者向けに新型コロナウイルス感染症防止対策ガイドラインを公開。
	9	二次試走	・責任者・パートチーフを中心に二次試走を実施。 ・大会開催を見越して当日運営者の招集を始める。 ・追加調査後(地図第二版)も地図精度が芳しくなく、修正調査をNishiProに依頼する。 ・会計を精査。 →スプリントおよび併設大会中止により、当初より赤字額が大幅増。学連への追加融資を依頼。 ・自助努力としてJapan-O-entrYを使用した、地図販売を通じた寄付金募集を企画。
		学連のインカレ開催判断	・9月15日付でインカレ開催の要請を受け、UNIVASとの連携を開始。昨年同様のハイライト動画撮影に加え、感染症対策の資材提供にご協力頂いた。 ・坂野山遊地図企画の協業により、実行委員会独自のライブ配信プロジェクト始動。
		三次試走 →3週間前準備	・NishiProによる修正調査中につき、コース試走は実施せず。テレインとヤマカワハウスでの準備作業に充てた。配信の現地テストもこのタイミングから開始。 ・当日スケジュール案の策定に加え、新型コロナ対策に留意した上で、参加者の当日の動きを検討し始める。
	10	2週間前準備 →三次試走	・NishiProによる修正が完了した地図(第三版)で実施。本試走にてコースを確定。

		要項 3 公開	・感染症対策に伴い、例年と異なる内容、注意事項が多くあった。 この時点でも大会参加許可を得ようと学生課と交渉している大学も少なくなく、大会の全容が記載された要項 3 は感染症対策ガイドラインと合わせて、交渉資料としての意味合いも持つものであった。
		1 週間前準備	・ポスト設置、ヤマカワハウスでのパート資材準備、配布物詰、地図チェック等を実施。 ・坂野企画に地図シーリングを依頼。
		大会当日	・サブチーフ以下の運営者はほとんどが前日準備にて初めて現地入りしたため、急入りにパートミーティング、全体ミーティングを行った。 ・当日の検温、アルコール消毒、感染防止に関する申告書の提出等、新型コロナ対策に万全を期した運営となった。応援方法の指導や三密回避を目的とした会場内見回りも行ったが、学生たちも大変協力的であった。
	11	大会終了後 2 週間	・本大会における新型コロナウイルス感染者の発生は確認されず。
2021	1	会計 報告書公開	

4.2.3 実際の運用と反省

○人事

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中で大会開催の実現性が全く予想できなかったため、主要役員以外の招集は比較的遅い時期にせざるを得なかった。サブチーフは 8 月の運営継続判断前後、当日運営者集めは 9 月の二次試走後のタイミングとなった。

エントリー時期を繰り下げたことで、7 月から 8 月の現地作業のない期間でいかに 9 月以降の作業の計画を立てるか、事前準備をしておくかが運営を滞りなく進めるかの鍵であった。しかしながら、上述の通りインカレ運営未経験者も多くチーフに据える運営体制であったため、サブチーフの招集は早めておく必要があったと感じる。一方でこの時期は感染が再拡大し始めた時期であったため、運営者の追加招集にもいささか心的抵抗があり、難しい状況であった。結果的には、経験豊富なサブチーフ陣、当日運営者の方々のご協力もあり、無事に選手権大会を成立させることができたが、多くのチーフ・責任者にはご負担をおかけすることとなったのではなかろうか。今後の運営の参考にして頂きたいところである。

○オンラインミーティング

関東近郊でのミーティングによる運営者の顔合わせも困難であり、現地での試走・事前準備も感染拡大防止策の一環として、役職者を中心とした必要最低限の人数での実施であった。このような理由に加え、感染症拡大に伴うイレギュラーな議題が多くあったため、頻繁にオンラインミーティングを開催することとなった。コロナ禍の鬱屈とした日々において、このような機会は顔つなぎ、運営モチベーションの維持に非常に重要な役割を果たしていたと言える。ただ、居住場所や社会情勢に関わらず運営者が一堂に会する利便性を有する一方で、平日夜に度々のミーティングを行うことは生活の負担にもなる。議題を整理したりミーティング資料を事前に用意するなどして短時間で効率よく行う必要があると痛感した。

○役員負荷について

上述の通り、実行委員長には岡崎氏に着任して頂いたものの、これは栃木県協会の名のもとで実行委員会が運営を進めていくための政治的側面が強かった。このため、運営の実態は例年の実行委員会方式と比べて大差はなかった。むしろ、運営組織の筆頭に立つのが競技責任者と運営責任者の2名のみとなったため、両責任者の運営負荷の増大に繋がった可能性は否めない。実行委員長分の働きを、実行委員会発足時は宇都宮在住で栃木県協会とも関わりの深い松尾が、大会が近づくにつれて糸が主に担当することとなった。このような状況において、EAの佐藤氏には運営全体の様々なところに目を配って頂くとともに、包括的なアドバイスを頂いた。例年の実行委員長分の、頭一つ足りない部分を補って頂いたことに感謝申し上げる。

また、今回の運営は以下の事由により役職者、責任者の精神的負荷も大きくならざるを得なかった。

- ・7月半ばでのスプリント中止の決断

- ・9月の学連判断までは本当に大会が開催できるかが非常に不透明であった

スプリント中止の経緯については9章を参照のこと。実行委員会を分けているとはいえ人員や資材を共有している以上、ロング実行委員会の幹部はスプリントの運営詳細にも必然的に気を配ることになる。実際、スプリントの中止判断の際にはロング関係者も積極的に議論に加わっており、スプリント専属運営者はもちろんのこと、8月の運営継続判断の直前に神経をすり減らしたロング専属の運営者も多かったのではないだろうか。

一方で、タイトなスケジュールの中で感染症対策に留意しながら、絶対に選手権を成立させる必要のあった今回の運営では、ロング一種目の開催が限界であっただろうという意見も聞かれた。

8月に栃木県からの運営許可がおりるまでは、山川氏やEAから「あまり大会を開催することに入れ込み過ぎずに」という助言を頂いていた。これは昨年度の春インカレで、開催のためにあらゆる可能性を模索し続けたものの努力報われず、疲弊しきってしまった山川氏の当時の経験に起因している。おそらく8月の時点で「何が何でも秋インカレを開催する」と心底思っていた運営者は少なかったのではないだろうか。エントリー開始以降からは例年になくタイトなスケジュールリングの運営が待っており、気持ちを切り替えて取り組む必要があったものの、9月の学連の大会開催判断をクリアしないことには本当に大会が実現するのかが未定であった。今後はインカレ運営がこのような非常事態下におかれなことを願うばかりである。

○渉外業務の進捗状況管理

渉外には責任者の山川氏、県協会の荻田氏が実働部隊として現地での活動にあたっていたが、今回の運営では実行委員会から宮川早穂氏(立教大学12年度入学)を副責任者として立てることで、実行委員会と渉外実働部隊との連携強化を図った。具体的には、実働部隊のスケジュールを宮川氏が管理することで、実行委員会側からの渉外依頼を実働隊に漏れないよう伝達したり、リマインドを促してもらうなどした。年によっては渉外の遅れが問題として報告されていたこともあり、実働部隊の動きやタスクの期限を管理する人物を実行委員会に立てることは、タイトなスケジュールでの運営となった今回の大会においては必須であったと言える。

○その他

本大会では新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として様々な措置を講じてきた。これに伴い、上述のように運営スケジュールは例年と大きく異なり、追加のタスクも多く生じた。オンラインミーティングを数多く設け、その都度スケジュールを調整すると共に、対策チーフの八神氏に数々の仕事をこなして頂いた。詳しくは7章を参照のこと。

財政的にもスケジュール的にも厳しい状況であったが、少しでもインカレを盛り上げるため、そして選手たちの走り、想いを多くの人に届けるために配信プロジェクトにも取り組んだ。これについては8章を参照のこと。

最後に、今年もUNIVASの配信事業との連携を行なった。昨年はドローン空撮が選手の走行に影響

響を与えてしまったという事案があったが、本年の取り組みについては 4.3.4 を参照されたい。また今回は UNIVAS より感染症対策用の資材を多くご提供頂いた。この場をお借りして感謝申し上げます。

4.3 競技準備の経緯

競技準備・地図作製のスケジュールを以下に示す。

3 月 14 日	0 次下見
5 月末	競技エリア地図第一版納品
6 月 14 日	一次試走、地図フィードバック、1 次コース案（選手権クラス）
8 月中旬	競技エリア地図第二版納品
9 月 5,6 日	二次試走、地図フィードバック
	NishiPro 調査、競技エリア地図第三版納品
10 月 3,4 日	三次試走（2 週間前準備）、地図微修正、スタートリスト確定、要項 3 発行
	コース確定・コース含む完成地図データ確認（Web にて）
10 月 10,11 日	1 週間前準備：競技用地図納品、一般の部競技地図現物確認
	シーリング（外部委託）
10 月 16 日	選手権の部競技地図現物確認、シーリング
10 月 17 日	競技地図最終確認
10 月 18 日	大会本番

4.3.1 競技地図の作成

今大会はコロナ感染症の影響で特殊な準備形態となり、大会直前が非常にタイトなスケジュールとなった。形態としては栃木県協会より YMOE 社へ地図作成を依頼し、YMOE 社から委託された各マッパー（宮西氏、坂野氏、高野氏、NishiPro）によりニューマップが作成された。

今大会は YMOE 社からの委託関係およびコロナ感染症の影響から、地図作成は比較的余裕を持って第一版が完成した。一方で、試走の実施スケジュール・委託先の調査スケジュールの関係から、地図修正が思うように行かず、結果として YMOE 社から NishiPro にも修正調査を依頼することとなった。

YMOE 社とは、インカレ実施直前期に対する業務委託契約（インカレ業務に集中すること）を結んでいるが、YMOE 社委託先の地図調査者に対しては、インカレ直前期の地図修正スケジュールが適切に確保されていなかった。余裕のある試走の実施はもちろんだが、地図調査者への当然の依頼として、修正作業のスケジュールを事前に確保しておくことが望ましい。当然ながら、複数回の試走で数多くの修正依頼を出さないような地図が納品されることを願い、今後も地図作成事業に従事していただきたい。

4.3.2 コースの設定

本大会は栃木県矢板市の栃木県民の森にて実施した。詳細に関しては 3 章(コース解説)をご確認いただきたい。

テレインの都合上、0 次下見のタイミングから「会場・フィニッシュ」および「選手権スタート地区」を決定した。

4.3.3 コロナ対策による例年からの競技上の変更点

・選手権待機所

選手権待機所については、事前に公表し、運営で輸送するのではなく直接向かってもらうようにした。これは、選手権スタート時刻を例年より遅めに設定し、当日の移動に極力配慮した結果で

ある。

当日は天候が崩れなかったことからトラブルはなかったが、待機所自体は青空会場であり、運営で用意したテントのみでしか雨を避けられなかった状況だった。そのため、駐車場の車にも一定時間までは待機できるよう調整をした。

駐車場に待機できるとなると、問題としては通信機器使用による、会場と選手権待機所間でのコミュニケーションである。本大会では、事前に時間限定での通信機器使用禁止を周知したほか、会場と選手権待機所での見回り等を行ったが、特段当日にトラブルは無かった。

・テクニカルミーティング資料

事前に Web 発行を行い、質問事項を募集する形をとった。

・公式掲示板

上記テクニカルミーティング資料における質問事項に対する回答をまとめた。前々日までに Web 掲載することで、前日移動へ配慮する形をとった。

また、当日は一般クラススタート地区、選手権クラス待機所に設置し、掲示板前に選手が集中しないよう配慮した。

4.3.4 安全対策

・車

本レーンの中央には太い主要道が通っており、交通量はそこまで多くないものの、試走中もスピードを出す車が見られた。

一方で、ルートチョイスの幅を狭まること・無用なトラブルを避けることから、競技途中の誘導や渡河点の設置は行わなかった。

そこで、地図上での主要道の端に立て看板を設置し注意喚起を行うとともに、競技中特に選手が横断するであろう地点にも立て看板を設置し、ドライバーへの注意喚起を行った。

・UNIVAS

今回、昨年度に引き続き、日本オリエンテーリング学生連盟を通じてUNIVAS（一般社団法人大学スポーツ協会）から本大会の取材の申し出があり、ドローン及び現地スタッフによる大会競技中のハイライト 動画撮影を実施した。

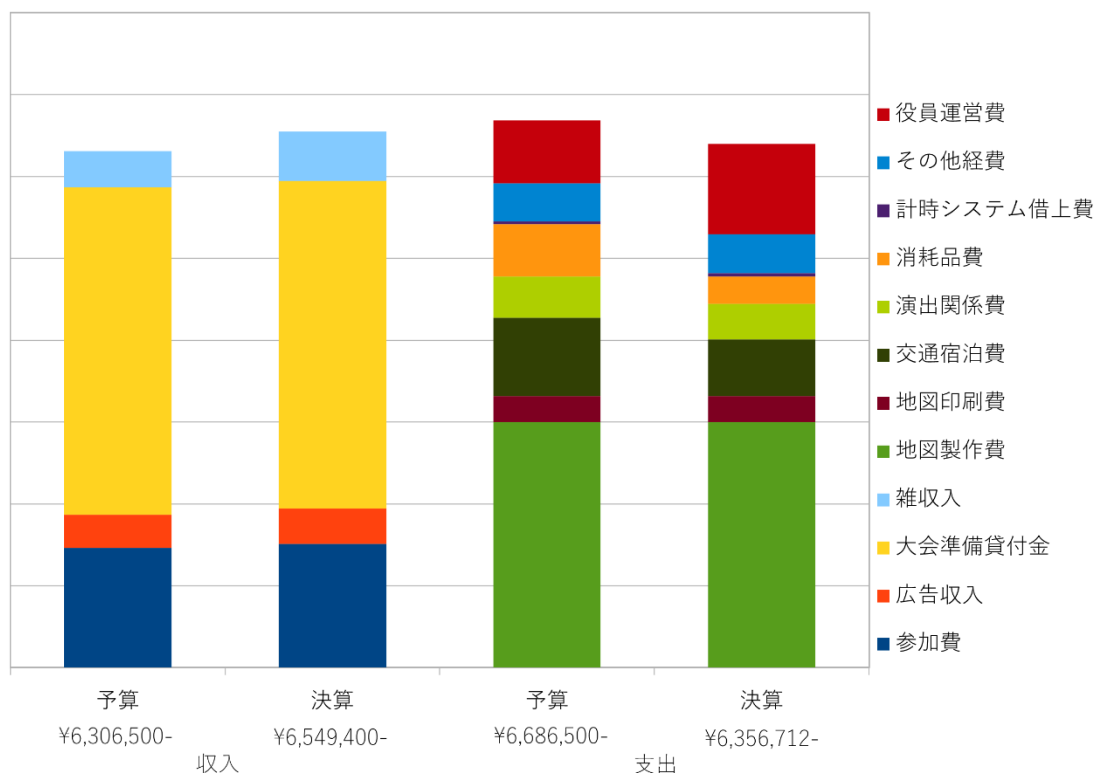
昨年度大会の反省を活かし、撮影箇所については2週間前の三次試走および前日準備時に競技責任者を通じて打ち合わせを行った。事前に競技地図を渡し、選手の動線を説明するなど、丁寧に対応した。結果として、トラブルは聞こえなかったことから、UNIVASとの連携は特に競技面は丁寧に行うべきだろう。

4.4 会計報告

本項では、本大会における会計業務の結果と行動について記す。

4.4.1 簡易決算報告

まず初めに、本大会において、策定した予算と1月6日時点での決算の結果概略を以下に報告する。この結果は、ロング競技部門に加え、中止となったスプリント競技部門の準備に係る経費をまとめている。以下の項目では、この結果を中心に、例年との比較を交えながら簡単な解説を行う。



4.4.2 予算案の策定

会計的に大会を成功させるためにも、予算案策定時点での十分な検討は必要不可欠である。例年と比較し、本年度で注力したと思われる内容を中心に、予算案の策定経緯について以下で述べる。

・支出項目の検討

支出項目のうち最も割合が大きい地図作成費を見積金額で固めつつ、例年の予実金額を参考にその他の項目の予算を設定した。地図作成費の次に割合が大きい交通宿泊費については、それぞれの試走や事前準備、大会当日の上限人数や宿泊施設を想定して予算を設定し、大きく上振れして収支に悪影響を及ぼさないよう努めた。運営者への負担を増やさないためにも必要以上の経費削減は行わなかった。

・役員運営費の見直し

昨年同様、大会運営人材を確保し、今後のインカレを継続するための「ボランティア体質の脱却」を図るため、大会役員が活動する上での運営費について検討した。試走や事前準備、大会当日の日当を昨年度から増額し、増額分は予算には計上した。また、昨年度に引き続き、責任者級役員（事前準備責任者および当日チーフ役員）の手当についても予算に組み込んだ。

・日本学連からの財政出動と参加費設定について

4.1.4項や4.2.2項に記載の通り、本大会では、新型コロナウイルスの影響により、エントリー開始時期を繰り下げた。大会運営において参加費は収入の大部分をしめているにも関わらずこのような措置をとったことで、地図作成費や試走等の大会準備期間中の支出を賄う財源の確保が必要となった。そこで4月の県協会総会において、日本学連の口座に貯蓄されていた潤沢な資金から、300万円の貸付金を依頼することを決定した。

当初は貸付金の名目で、運営終了後に返済する算段であったが、コロナ禍で課外活動に制限がかかる大学が続出し、各大学の新生勧誘活動が困難となっていたこと等により、参加者数の大幅減に伴う赤字運営になることが想定された。このような事情から、貸付金ではなく「赤字運営

の補填金」としての運用となることで、学連幹事や木村理事、山川氏の間で合意が形成された。

このような状況下で、上記記載の支出項目を整理しつつ、参加費を決定した。「新型コロナウイルスの影響により、アルバイト等による学生の収入が厳しい状況にあることを踏まえると、参加者減をくい止めるために昨年度よりも参加費を引き下げる必要がある」との山川氏の提言を受け、補填金を頼みとした低額の参加費設定での予算組みとなった。

しかしながら、併設大会の開催を見送ったことや、スプリント分の収入がなくなったことも重なり、エントリー受付後の会計精査において、大幅な収入減が発覚した。この結果追加融資を受け、4,000,000 円の財政出動を受けることとなった。

なお、学連からの財政出動が約束されていたこともあり、中止となった場合の業務負担の削減を目的として、参加費徴収は大会終了後とした。

4.4.3 決算結果について

・全体概要・総評

予算時点で赤字を想定していたものの、収入増、支出減となった結果、最終的には黒字となる見込みである。OB・OGに対して募った寄付金が多く集まったことが要因のひとつである（下記詳細）。

・収入詳細

スプリント及び併設大会の開催中止並びに参加費の引き下げにより、昨年度と比較して大幅な減少となったが、予算からは増額となった。これは、赤字補填を目的として、寄付金付き地図販売という形で、OB・OGに対して寄付金を募ったことが大きな要因である。結果として、総額 538,000 円の寄付金が集まった。

・支出詳細

予算に対し、支出は減額となる見込みである。これは参加者減による地図印刷発注数の減少、ナンバーカード印刷等消耗品費、傷害保険費が想定されたより低く抑えられたことが要因で、ヤマカワハウスにすでにある資材を重複して購入することのないよう徹底して管理を行ったことも寄与している。

5.1 はじめに

日本学生オリエンテERING選手権実施規則（以下、「インカレ実施規則」）34 条に基づき業務を遂行した。本大会における業務報告、及びイベント・アドバイザーの視点から本大会で見受けられた課題と今後の提言を以下で述べる。また、インカレ実施規則 35.2 項で規定の「幹事会、理事会及び技術委員会への活動報告」は本内容をもって代えさせていただく。

加えて、本大会の EA である私はオリエンテERINGにおける競技的実績が乏しいため、インカレ実施規則 34.6 項に基づき、EA として実績のある NPO 法人トータスの石澤氏に補佐を依頼し、受諾いただいた。この場でお礼申し上げます。

5.2 業務報告

要項等発行物確認

全ての要項および発行物の公開前に、その内容がインカレ実施規則に準じていることと適正であることを確認した。

また、インカレ実施規則の不適用事項について、実行委員会内での判断を確認し、木村理事を通じて技術委員会への諮問及び理事会への申請を行った。

さらに本大会では新型コロナウイルス感染防止対策関連資料を作成したため、日本学生オリエンテERING連盟（以下、「日本学連」）作成の日本学生オリエンテERING選手権大会開催における新型コロナウイルス感染防止対策ガイドラインにおいても内容の確認も行った。

会場、トレインの適格性確認

本大会の会場は矢板市のイベントで使われることもあり、駐車場のスペースやアクセス性、新型コロナウイルス感染症防止の観点を鑑み、本大会の会場として十分な広さであると判断した。

EA に任命された段階でトレインは決定されていたため、当該トレインを利用して競技を行うことを前提として、トレインの適格性判断を行った。

トレインとしては概して走行可能度は高く、急峻な斜面を擁し、インカレロングを行うに充分適したトレインであると判断した。

スケジュール全体の確認

スケジュールにおける実行委員会での判断を以下のように確認した。

・スタート時刻、選手権クラスのスタート間隔について

新型コロナウイルス感染症防止対策のため、遠隔地の参加者も前泊せずにできるだけ参加できるよう、例年よりスタート時刻を遅らせる処置を取ることにした。（前年のインカレロングトップスタート時刻は 9 時であるのに対し、本大会では 10 時半とした）ただし、その影響で全体的にスケジュールが後ろ倒しになった。その問題を解消するため、選手権の部のスタート間隔を 1 分間隔にすることで全体的なスケジュールの圧縮を図った。選手権クラスのスタート間隔を 1 分にしても前走者が次走者に与える影響も確認し、問題ないと判断した。

・運営スケジュールについて

新型コロナウイルス感染症の流行により、本大会の要項 2.0 に記載のあるようにインカレロングの開催可否判断を 2020 年 8 月 15 日に行うことにした。この判断が問題ないことを確認した。この判断については本大会の運営責任者、競技責任者等の役員に加え、行政を含め本大会がインカレとして成り立たせるギリギリのラインとなった。結果として大会は滞りなく開催することができたが、例年以上にタイトなスケジュールとなってしまった。

スタート、フィニッシュのシステムとレイアウト確認

各パートチーフ、競技責任者とともに当日の選手の動きやレイアウトに問題がないことを確認した。前述のように選手権の部でスタート間隔を1分とした影響もあり、1分前の選手が見えてしまう可能性も考慮したが、仮に見えたとしても今回のコースでは競技に与える影響は小さいと判断した。

また、本大会では新型コロナウイルス感染症防止対策のため、スタートでは人による発声ではなく、機械音声を用いたアナウンスを採用した。スピーカーを用いることで広いスタート地区であっても音声が伝わることを確認した。また、選手権クラスではスタート1分前の案内を口頭ではなく紙面で対応した、紙面の内容についても問題がないことを確認した。

計時システムの信頼性と正確性判断

EMIT 社製の電子パンチングシステム (Electronic Punching and Timing System) を採用した。こちらは過去の大会実績から適切であると判断した。

地図規定照合

競技責任者・コース設定者と共に現地及び机上での検証を経て、各地図図式規定に適合していること、判読性について問題がないことを確認し、競技用地図として適切な水準の地図であることを確認した。

地図の正確性、作図や印刷の妥当性確認

地図の正確性は複数回に及ぶ試走等の準備により確認を行った。

印刷後の地図については、競技地図の全数確認により、印刷のかすれや滲み、色の不調、誤記が無いことを確認した。

コースの適格性確認

現地での試走会と競技者のレベルを考慮し適切であると判断した。

コース設定者・競技責任者の見解を踏まえ、競技者のタフネスさとルート選択能力を問うコース設定になっていることを確認した。

難易度については、ロング・ディスタンス競技部門らしいロングレックの設定が現地・机上検討で十分に練られていること、比較的分かり易いコントロール位置であることを確認した。安全管理については、危険箇所を回避したコース設定となっていること、道路横断箇所の対策が施されていることを確認した。

コースの長さについては、試走会の結果と過去大会の優勝者の走行速度・トレイン特性による机上検討から設定した。今年はオリエンテーリングの機会が少なく、判断が難しいところもあったが、学生の想定を超える走りにより、わずかに設定タイムを切られる理想的な展開となった。

コントロール位置説明の適格性確認

現地の確認及び試走担当者の報告から、全ての競技用地図について適切なコントロール位置説明が使用されていることを確認した。また、配布用のコントロール位置説明についても競技用地図と合致しているかを確認した。

式典の適格性確認

式典の準備及び当日の進行について確認した。

本大会では新型コロナウイルス感染症防止対策のため、メダルや賞状の手渡しを止め、各自でピックアップしていただく方式を採用した。また、インタビュアーにもフェイスガードをする、表彰される選手もマスクを着用していただいた。

報道関係者、観客等に対する処遇の確認

・UNIVAS について

ドローン等選手に影響を及ぼす可能性のあるものは場所を指定した。

テレイン内については競技責任者とともにごちらで指定し、選手に影響を与えないよう注意を払った。

・観客について

本大会では、新型コロナウイルス感染症防止対策のため、要項 2.2 に記載の通り出走する学生およびオフィシャル以外の来場は禁止とすることを確認した。

運営組織、人事、会計及び競技運営全般の確認

・運営組織、人事について

パートチーフの役割、仕事内容、人物適正の確認を行った。本大会ではインカレ運営の経験が少ないパートチーフが多く、またオフラインで集まることはできなかったが、オンライン会議を通して仕事内容の確認等を進めることができた。

・会計について

本大会では赤字会計ながらも参加費を下げることを確認した。

参加費を減らした背景としては、新型コロナウイルス感染症流行により、学生がアルバイト等をあまりできていないという状況を鑑みたため。

赤字会計の補填として、日本学連から貸付金を借りて補うこととした。

その他確認事項

・ライブ配信について

本大会では、前述の通り学生およびオフィシャル以外の観戦を禁止しているため、YouTube によるライブ配信を行うこと、その内容が問題ないことを確認した。

EA 業務外活動

- ・運営者グッズ作成
- ・地図名提案

5.3 おわりに

本大会は特に調査依頼もなく、流行の感染症にも負けず、素晴らしいインカレを提供することができました。2019 年度の春インカレが中止となり、学生にとっては一年ぶりのインカレとなりましたが、オリエンテーリング不足を感じさせない素晴らしい走りを EA という立場でみることができ、非常に快い気持ちとなりました。

谷野幹事長含めた日本学連の皆さんの熱意、大会開催のために尽力してくれた各責任者、パートチーフの皆さん、新規地図を素晴らしい速度精度で作成してくれたプロマッパー、寄付していただいた全国の老若男女のオリエンティア、どれか一つでも欠けていたらここまでの成功は出来なかったと思います。EA として不足している部分も多分にあったかと思いますが、こうした皆さんの努力で無事に大会を終了させることができました。

何かと大会運営が難しい状況はしばらく続くと思われますが、皆さんの力で見えないウイルスに打ち勝っていきましょう。

6 将来への提言

6.1 オンライン化する運営について

運営責任者 糸 潤哉

Slack を用いた組織運営はもはや近年のトレンドとなりつつあるが、集会の開催が制限されたコロナ禍での運営においては、Zoom 等を使用したオンラインミーティングが新たなトレンドとして加わったと感じている。感染症に関するイレギュラーな議題が多い中では、Slack の文章のみでは意思疎通するにもなかなか厳しかったであろう。4.2.3 項記載の通り、顔つなぎなどの意味も相まって、オンラインミーティングの果たした役割は相当なものであったと考えられる。

一方で、どこでも・いつでも集まれる、という利便性は実際に集まるのに比べてはるかに都合がつけやすいのは言うまでもないが、その利便性が裏目にでることもあるのではないかと危惧している。今回の運営では議論する内容が多かったため、人が集まりやすい平日の 21 時、あるいは 22 時からミーティングを企画することが多かったが、日中の仕事終わりの運営者に夜の時間の多くを費やしてもらったことになる。妻帯者や同居人がいる場合はその人たちにも何らかの形でストレスや負担を与えることになるだろう。平日に開催を企画する場合は特に、アジェンダを整理したり、資料を用意するなど、効率よく進めることを意識するべきであると感じた。

また、運用してみた際の所感として、音声トラブルを避けるために基本的に一人しか喋れない、発言のタイミングが難しいなど、意思疎通の難しさをデメリットとして感じた。この点は実際に集まって、対面でのミーティングを行う場合には敵わないだろう。安定したネットワーク回線の有無によって、ミーティングに積極的に参加できるか否かが左右されてしまう点も難しいところである。

今回は Google Drive や Slack などの利用に関しては大きなトラブルもなかったと思われるが、包括的に運営を眺める立場としては、機密情報と感染症関連のイレギュラーな議論等が同列に並んだりして、情報が入り乱れているようにも感じられた。今年度の全日本スプリント運営のような事例もあるため、情報の伝達・集積方法についても検討の余地はあると考えられる。

様々なメリット・デメリットを踏まえた上での、より最適な運営の進め方が構築されていくことを期待する。

6.2 運営体系について

運営責任者 糸 潤哉

繰り返し記載しているが、本大会は栃木県協会のフランチャイズ運営であった。しかしてその実体は、昨年度春インカレ等の「通常の実行委員会方式」と大差ないものであった。フランチャイズ形式自体は、インカレの継続的な運営と、その担い手となる都道府県協会やクラブの利権とを考慮した理想的な体制ではあると思うが、今回のような「何かあった場合は栃木県協会が親玉として責任を取る」という名目で、実質的には実行委員会主体の運営体制である、というのでは理想から遠いものであると言わざるを得ない。山川氏や荻田氏のご協力・ご尽力に感謝は尽きないが、下部組織に実行委員会を設けた上でフランチャイズを称する以上はやはり、運営母体の組織から運営の中心を担って、実行委員会を引っ張っていくことができる人物を数名擁立することは必要ではないかと考える。今回のような体制では、フランチャイズの名目である、インカレブランドの「運営経験」という財産は協会には残らないだろう。例えば、競責補佐、運責補佐といった要所に、若手～中堅層の人物を母体組織から擁立できるのであれば、(あくまでも)母体組織が実行委員会の力を借りながら運営している体制と言えるし、彼らは運営経験や人脈等を母体組織に持ち帰ることができる。

また、実行委員長が母体組織の組織長であることは名目的には真っ当なものであると言えるが、実行委員長分の職務を運責、競責、EA で分担した今回の経験を踏まえると、実行委員長補佐のような形で、アクティブな人材を擁立して頂きたいとの所感も抱いた。

その一方で、理想的なフランチャイズ形式を全うできる団体は、現在の日本のオリエンテーリン

グ会にはわずかにしか存在しないだろう。そういった背景においては、いずれはどこかの団体の運営筆頭となるかもしれない現在の若手 OB・OG たちを実行委員会という形で集め、彼らに要職の経験を積ませるとするのは将来的な投資でもあると言えるだろう。

もう一点、現在の山川氏に依存した体制についても改めて文章として残しておく。これまで、日本学連は YMOE 社と基本契約を行っており、インカレ実行委員会は渉外業務について山川氏へ発注を行っている。業務内容はトレイン・大会開催内容により多岐にわたっている。一方で山川氏は日本学連副会長も務めており、インカレのあり方についての幹事会での議論や開催に向けた様々な判断を共にしている。そのような状況の中で、今回は山川氏が所属する「栃木県協会」のフランチ運営であった。例えば予算案の策定などの際には、YMOE の山川氏と栃木県協会の山川氏が同時に顔を出すことになり、フル稼働でご尽力頂いたことに感謝する一方、組織のあり方として問題はないのかと率直に疑問も感じた。

また、試走時の宿泊場所としてはもちろん、今回はヤマカワハウスを資材の調達・管理にも利用させて頂いた。今後も栃木県周辺での開催となったあかつきには実行委員会が利用を検討するだろう。しかしながら山川氏にもいつかは引退の 때가訪れるだろう。その時にも備え、ヤマカワハウスという一つの財産をどのように管理、引き継いでいくかなども、然るべき組織で議論して頂きたい(もちろん山川氏本人やご親族のご意向を尊重した上で)。

これまで多くを山川氏に一任してきた渉外業務に関しては、渉外責任者補佐からの以下の提言を参照されたい。

6.3 渉外業務の進捗管理について

渉外責任者補佐 宮川 早穂

今回の体制で、4.3.2 項に運営責任者が記載した通り山川氏の渉外内容を項目別に管理し、実行委員会と山川氏・サポートに回っていただいた県協会の荻田氏との認識合わせ・橋渡し役を渉外責任者補佐が担うこととなった。具体的には、競技班とのスタート待機所や競技中使用する主要道路の位置・使用する設備の確認、UNIVAS とのドローン使用の調整、交通パートとの車両通行計画の確認、資材担当との市役所へお借りする大型資材の調整などである。全ての Slack チャンネルに目を通し渉外に関連する事項については把握し、山川氏・荻田氏に渉外進捗状況の確認を行った。「①実行委員会側での渉外内容の把握・管理」と「②実際に現地で渉外を遂行する業務」は分けることができるという点は特に将来の実行委員会への提言として残しておきたい。

次に、どのような人材が①②に適しているかを記しておく。ぜひ、今後の実行委員会の人事・体制をこれから組むことがあるならば認識しておいてもらいたい。

まず、「①実行委員会側での渉外内容の把握・管理」については、おおまかなインカレ運営の流れを理解しているか、おおまかな渉外の流れ(学生大会レベル)を理解しているか、どちらかの(可能であるなら両方)経験がある方が望ましい。一方が分かっているれば、もう一方は補いながら進めていくことが出来ると思う。また、渉外管理の役割は、実行委員長・運営責任者・運賃補佐等の幹部が兼ねることも可能である。やるべきことが分かっているればそこまで業務量として多くはない。適任がいれば、今回の体制と同様、渉外責任者補佐を立てると良い。

「②実際に現地で渉外を遂行する業務」については、これまでは長らく山川氏への渉外業務委託でインカレ運営は成り立っていた。山川氏は今回開催地の矢板市への人脈はもとより、新規渉外においてもオリエンテーリングの渉外時の勘所を抑えている。また、その見た目とは裏腹に電話・現地訪問どちらにおいても丁寧で、結果渉外先の信頼を勝ち得る。(これほどまでの業務を遂行いただいているにも関わらず、格安で業務を請け負っていただいていることには改めて感謝の念が尽きない。)ただ、学生オリエンテーリング界としても、オリエンテーリング界全体としても今後も山川氏に頼り切りになるわけにはいかないだろう。その際にポイントとなるのは、社会的に地元の方の信頼を得られる年齢・地位の人材であること、現地にいて平日日中も対応が可能であること、の2点であると考え。この2点は役割別に2名の対応者がいることも可能であるし、また①の渉外管理業務と業務を兼ねることも可能である。前者のある程度の年齢・地位の方を探す際は、地元の

県協会に相談することを推奨する。後者については、マッパーにそのような役割を委託する、平日日中の仕事の都合が付きやすい人材が担当する等、体制や渉外難易度によってもある程度変則的に状況別に人材配置が必要になるだろう。

まとめると、そもそも渉外業務は、「実行委員会側の調整」「現地での調整」の2側面があり、さらに「現地での調整」については、「地元の方の信頼を得る役割」と「関係構築後に常時連絡を取る役割」の2ステップがある。それらを各々の実行委員会ごとの事情・状況を鑑み、誰がそれぞれの役割を担うのかを明確にしてから初期の実行委員会立ち上げを進めることを将来の提言としておきたい。

6.4 選手権大会の競技成立に向けた運営体制について

競技責任者 松尾 怜治

選手権大会たるインカレを成立させるために、一番に優先すべきは競技の成立である。本大会では、実行委員会は運営責任者と競技責任者と EA で実行委員長業務をカバーせざるを得なかった。そこで、競技班は①競技責任者②副競技責任者③プランナー④EA およびコースアドバイザーと手厚い布陣を敷き、競技地図データの最終確認や複数人での全ボク、地図チェックを行った。インカレ運営は限られた人数であり、競技責任者が必ずしも競技面に全集中できないことも予想されることから、複数人での繰り返しチェックを行うという体系はミスを防ぐという観点から非常に重要である。

また、コロナ禍の運営において、トラブルを避けるべく以下のような工夫を施した。テレインの都合上全てを実現することは困難であるかもしれないが、イレギュラーな運営スケジュールや限られた人員での運営であってもインカレという選手権大会を成立させるための工夫と考え、次回以降の大会運営に役立てていただきたい。

- ① **スタート地区は極力開場・選手権待機所近くに設定**
 - 人繰りが柔軟に行える。（一般クラスのスタート人員が午後は演出人員に、等）
 - スケジュールの後ろ倒しが可能。
- ② **フィニッシュは一般・選手権共通で会場に設定**
 - 人員（フィニッシュ・計セン）の集約化。
 - 誘導テープ等準備が不要。
- ③ **スタート地区での自動音声・紙掲示**
 - 人員の削減が可能。
- ④ **競技中の誘導はスペクテーターズレーン・フィニッシュレーンのみ**
 - 競技中の誘導は最もトラブルが起きやすい傾向にあることから、設定しなかった。
- ⑤ **選手権待機所の事前発表**
 - スケジュールの後ろ倒しが可能。
 - コースの予想が立ちやすくなるが、参加者に共通な情報であり問題ないと判断。

新型コロナウイルス感染症対策担当 八神 遥介

本大会では、昨年度末からの COVID-19 感染症の拡大を受け、各パートの感染症対策を横断的に監督する立場として本役職を設置した。ここでは、対策を立案・実行するにあたって留意した点、具体的な対策等について報告する。

7.1 基本方針

着手に際して、本大会における感染症対策の基本方針として、以下の3点を掲げた。

- ・グレーゾーンの行為を頭ごなしに禁止しない
- ・まずは代替手段、次善策を検討した上で、少しでも通常のインカレに近づける
- ・パート間での対策の整合性を図る

大会におけるクラスターの発生防止は最重要課題であるが、**端からリスクの低い事象に対する過剰な対策の乱立は、いたずらに経費や運営負担を増大させるだけである**。また、本大会は感染症拡大後、最初に開催されるインカレであり、今後のインカレ運営における感染症対策のモデルケースとなる可能性が高い。従前とは大きく異なる社会状況のもと、「インカレの質」を極力保ちつつ、運営プロセスに改善や代替手段が求められる点を明らかにするため、上記の基本方針のもとに感染症対策を進めるものとした。

7.2 事前準備

(1) ガイドラインの作成

渉外資料提出先及び参加者への周知を目的として、日本学生オリエンテーリング連盟と協働のもと、「日本学生オリエンテーリング選手権大会開催における新型コロナウイルス感染防止対策ガイドライン」を作成した。作成にあたっては、「スポーツイベントの再開に向けた感染拡大予防ガイドライン（公益財団法人日本スポーツ協会）」を参考とし、オリエンテーリングの競技特性等を反映したものとした。

(2) 運営者の感染予防策

現地での事前準備及び大会当日については、出席する運営者全員を対象とし、直近2週間の行動履歴の記録と当日の体調報告を義務付けた*1。また、特に室内で作業を行う際は、マスクの着用、大声の禁止など基本的な感染予防対策を呼び掛けるとともに、宿泊先の1部屋あたりの人数を2名以下とする等の対策を取った。

(3) 参加者対応

大会参加者およびチームオフィシャル全員に対し、(2)と同様、大会前2週間の行動記録と当日の体調報告を義務付けた*1。この詳細は7.3(2)に後述する。

また、各大学クラブが大学本部に対し大会参加許可申請を進めるにあたり、大学側から詳細な大会内容の詳細を求められる場面が頻出し、実行委員会側では個別に相談に応じた。これらの一部には競技情報も含まれていたため、競技責任者及びイベントアドバイザーと調整の上で情報公開の可否を判断し、競技の公平性確保との両立を図った。

*1：2週間分の行動履歴の記録は、栃木県オリエンテーリング協会からの要請に基づいて実施したものである。なお、プライバシーの観点から、行動履歴は大会参加者ないし運営者で感染者が発生した場合にのみ収集するものとした。

(4)UNIVAS との連携

本大会では、UNIVAS（一般社団法人大学スポーツ協会）より、感染症拡大防止を目的とした備品の無償供与を受けた。供与された備品を用い、大会当日は以下の感染症対策を実施した。

- ・トイレ及び更衣室等への消毒用エタノール、ハンドソープの設置
- ・非接触式体温計を用いた検温ゲートの設置
- ・表彰式スタッフのフェイスガードの着用

非消耗品及び余った消毒用エタノール等については、インカレスプリント及びインカレミドルリレー実行委員会に引き継いだ。

7.3 大会当日の対応

(1)主な感染症対策

7.2(3)に記したもののほかに、本大会で実施した主な感染症対策を以下に挙げる。

- ・スタッフテント（受付・計算センター）へのビニールカーテンの設置
- ・スタート地区の自動音声対応
- ・公式掲示板の Web 化、成績速報所の廃止
- ・トイレ等待機列の間隔確保、使用後の消毒
- ・地図回収の廃止

対策の配置計画にあたっては、感染症対策チーフより各パートチーフに対策案及び必要資材を掲示することで、パート間における対策方針の整合を図った。

(2)健康状態に関する書面の提出

参加者全員分の健康状態の把握を目的として、指定様式に従った申告書の提出を参加者に義務付けた。様式は事前に公開し、大学ごとに代表者が署名・提出する形式とすることで、受付における参加者の集中を回避した。また、大学ごとの配布物は申告書との引き換えとすることで、回収漏れの防止を図った。

(3)応援指導

選手の応援は競技と同様、インカレを構成する重要な要素のひとつであり、安易な全面禁止処置はインカレ全体の魅力、満足度の低下に繋がると思われる。感染症対策との両立を図りながら、実現可能な応援方法を探るため、本大会では「大声禁止・マスク着用・間隔確保」を最低限守るべき事項として抽出し、詳細な応援方法は「感染防止に留意した上で」各大学の自主性に委ねる方針とした。

大会当日は拡声器や録音音声、ボードを使った応援等、各大学で応援方法に工夫を加えている様子が見られた。本大会の事例をきっかけとし、今後インカレにおける持続可能な応援方法が醸成されていくことを期待する。

7.4 大会後の対応

万一、大会後 2 週間以内に参加者ないし運営スタッフ間で感染者が発生した場合は、以下の通り対応するものとした。

- ・大会連絡先への感染発覚の第一報
- ・主催者である栃木県オリエンテERING協会への報告
- ・同協会による本人へのヒアリング（感染経路、居住地での対応状況等）
- ・同協会から開催地自治体保険部局への報告

すなわち、開催地自治体との窓口としては、栃木県オリエンテERING協会に一任し、詳細な連携方法について両者間で事前調整しておくことを、同協会に依頼した。

7.5 今後への提言

最後に、本大会における感染症対策を通じ、今後改善が必要と思われた点を以下に挙げ、今後への提言とする。

・当日役員及び経費の増大

感染症対策の実施により、本大会では例年よりも多くの当日役員を要した。本大会では十分数の役員が招集できたが、開催地域や今後の社会情勢次第では、これが困難となる場面も想定される。一部対策のセルフサービス化、兼任を含めた役員配置等により、必要人員及び経費の削減に努めることが望ましい。

・ガイドラインの見直し

本大会に向けて作成したガイドラインにおいては、作成当時の社会情勢や感染症に関する知見を考慮した。しかし、これらの要素は現在も流動的であり、今後もワクチンの開発や経済活動の再開等により、インカレを取り巻く状況が変化する可能性が高い。これらを踏まえて、インカレの開催ごとにガイドラインの見直しを図ることが、より適切であろう。

8.1 経緯

新型コロナウイルス感染拡大による無観客試合の決定後、選手の勇姿を会場に来られない観客に届けたいという思いで小柴滉平（筑波大学 12 入学）によって発案された。日本初の本格的なオリエンテーリングのライブ配信を実現するだけでなく、今回一度きりの試みとせず継続して行うことを目指しており、そこで機材の維持管理とノウハウの蓄積を担う業者として坂野翔哉（東京理科大学 14 年度入学）へ協力の打診があった。坂野は坂野山遊地図企画の新規事業として小柴の構想を承諾し、ライブ配信プロジェクトが始動した。

この時点で大会当日まで 2 ヶ月を切っていたため、早急にライブ配信の大枠、それに必要な機材、人員、費用、スケジュール、他パートとの調整事項、坂野企画の見積もり等をまとめあげ、実行委員会と日本学連に提案した。オンラインミーティングを重ねた末、ライブ配信を行うことが承認され、運営者数や予算の制約を考慮のうえ配信専属の人員 11 名、予算 25 万円が割り振られた。

8.2 準備

配信パートは演出パートの中に設けられ、従来の演出パートとは協調しつつも独立に近い形で準備を進めた。小柴がパートチーフとして配信構成の立案、人員調整やスケジュール管理、他パートとの連携を行った。坂野はサブチーフとして機材の購入およびレンタル、配線や機材の運用を担当した。

配信パートの人員は専属 11 名に、他パートから協力いただいた兼任 3 名を加えて合計 14 名と十分数が確保できた。業務分担はディレクション 1 名、スイッチング 2 名、実況解説兼インタビュー 2 名、会場撮影 2 名、スタート地区撮影 1 名、競技中の選手追走撮影 2 名、機材管理 2 名、接近情報告知 2 名とした。実況解説の担当者は選手の情報収集と台本作成も行った。

今回のライブ配信は偉大な先人たちが積み重ねてきたノウハウのおかげで実現することができた。特に配信構成は国沢五月氏らが考案した 2015 年の第 8 回全日本スプリントの演出プランをベースとしており、的場洋輔氏には多くの機材やノウハウを提供いただいた。この場を借りて改めて感謝申し上げる。

8.3 実際の様子

映像中継×実況解説×成績速報を YouTube ライブ 1 つの画面で届けるという目標を達成した。提供できた映像は実況解説席、スタート地区、競技中の選手追走、スペクテーターズレーンの選手、フィニッシュの瞬間、インタビューと表彰式、ライブ成績速報、GPS トラッキングである。

多数の場面を状況に応じて切り替える判断、撮影者への指示、画質やフレームレートの不安定さ、途中で音響のスイッチが切れる操作ミスなど課題はあったが初の試みとしては十分と思えるものを提供できたと判断している。



8.4 会計

ライブ配信の財源については実質的に日本学連が負担者であり、前例がない事業の多額の費用負担については実行委員会の判断を超えるとの意見を受けて、見積もり作成後に日本学連幹事長からの承諾を得た。

また、大会会計自体の赤字が想定されていたため、配信内でも寄付の告知を行った。寄付者のコメントや YouTube ライブのコメントから配信視聴者が進んで寄付を行っている様子が見受けられ、配信は寄付に対するモチベーションの一つとなっていたと思われる。配信の経費以上の寄付が集まったとも考えられるが、寄付だけで今後もライブ配信を続けていくのは困難であるし不健全と考えているので、広告掲載や視聴有料化など検討していきたい。

8.5 反響

もともと会場に来られない OB や OG を視聴者として想定したライブ配信だったが、アーカイブとして終了後も全編を公開したことによって参加者や運営者も帰宅後に配信を楽しむことができた。選手権出場者は仲間の応援する姿や他の選手権選手の走りを見ることができたほか、森の中の自分の走りが撮られた選手は貴重な映像に興味を持っていた。運営者もほとんどの役員は選手の結果や会場の状況を見ずに大会を終えるため、配信によって初めてインカレの熱気を感じてもらうことができた。

さらに参加者の保護者や大学に対する競技や大会の説明、新歓での活用の検討、渉外先での資料用途にも使われたと聞いている。こうした想定外の様々な用途が考えられる動画素材だが、配信は日本学連の YouTube アカウントで公開されているので幅広く活用することが可能であり、配信に限らず動画資料の充実は日本学連の活動を広げるものと思われる。

8.6 今後の展望

坂野山遊地図企画の配信事業としての短期目標は世界選手権のようなリアルタイムなスポーツ中継動画の配信である。今回ようやくこれに近いものが日本で初めて実施できた段階であり、世界選手権と比較するとまだまだ洗練されていない。画質などハードウェア面での違いだけでなく、速報テロップや複数場面の合成、収録のリプレイなどソフトウェア部分、事前のスケジュール管理や台本作成なども工夫していく必要がある。

演出という点でも世界には遅れを取っていて、例えば観戦する面白さを会場選定やコース設定段階から十分に考慮されることは少ない。配信の視聴者へ提供できる情報も選手への競技情報提供とにならないよう配慮が必要であり、インタビューの方法や会場選定、選手権出場者隔離の方法にも競技部門と演出部門の緊密な連携が必要である。

配信事業を通した長期目標は、スポーツとしてオリエンテーリングを観戦する文化の醸成と収益化である。面白いスポーツであることを広く発信し、新たな競技者を増やすこと、世の中の人に認知してもらうことがオリエンテーリングを発展させるためには不可欠である。これについては継続して配信を行うこと、インカレだけでなく様々な大会に適用できるよう検討している。

9.1 概要

10月17日に「道の駅うつのみや ろまんちっく村（以下、ろまんちっく村）」での開催が予定されていたインカレスプリント 2020（以下、本大会）は、諸般の事情により開催断念を余儀なくされた。ここでは、大会の準備状況及び開催断念に至った理由とともに、今後のインカレスプリントの継続的な開催に向けた将来への提言を整理・報告する。

なお、**本大会の開催断念は COVID-19 感染症の拡大、それに伴う社会情勢の変化とは直接の関連性がなく**、以下に述べる渉外活動の不備が最大の原因であることを、最初に強調しておく。

9.2 大会運営の初動

(1) 実行委員会の結成

本大会の実行委員会は、YMOE 社及び栃木県オリエンタリング協会（以下、栃木県協会）より打診を受けたときわ走林会が、「フランチャイズ形式」として運営実務を担当し、会外の運営者を追加招集する形で結成された。また、試走及び大会当日の一般役員については、ロング実行委員会側と相互に協力・融通することで、人員の不足を補う方針とした。

なお、後述するトレイン決定の経緯から、開催地における以降の渉外活動についても、YMOE 社及び栃木県協会が継続して担当することとなった。

(2) テレイン及び日程の決定

トレインの選定は、YMOE 社及び栃木県協会が独自に担当した。3月中旬の渉外活動の結果、敷地内でのイベント開催の許可が得られた「ろまんちっく村」に決定した。同時に、同時期の他日程ではトレイン内で他イベントが予定されていたことから、開催日は2020年10月17日で固定となった。

9.3 準備状況

(1) テレイン管理者との調整

トレイン決定後の渉外活動では、主に以下の懸念事項が抽出された。

- ①会場として使用する範囲の半分をサーカス団体が占有。大会当日までには退去するが、試走時には残留している可能性がある。
- ②トレイン中央部の山林エリアは、道以外は立入禁止である。
- ③一般利用客が多い売店エリア等は、競技での使用は不能である。

以上の報告を受けて、実行委員会側では、競技使用範囲とコース回しを早期に決定するものとした。また、トレイン管理者と頻繁にやり取りすることで、トレイン内の新たな制約を早期に把握・報告するよう、渉外担当の YMOE 社及び栃木県協会に指示した*1。

*1：競技使用可能エリアの把握・確定は、トレイン管理者を交えて準備の初期段階に実施するべきであることが、インカレスプリント 2019 の報告書（以下、昨年度報告書）においても提言されている。

(2) 地図調査及びコースセット

地図調査は栃木県協会より専門業者に委託し、4月中旬には概ねの調査・作図が完了した。暫定版の地図及び(1)の渉外活動を踏まえ、競技責任者及びコースセッター等が現地視察を行い、競技使用範囲及びおおまかなコース回しの構想を練った。この時点で、トレイン内には既に立入禁止範囲が広く分布し、これ以上の使用可能範囲の縮小は、競技性の確保に対して著しく影響する恐れがあることが懸念された。

コースの素案は5月下旬には完成し、6月中旬の試走によって改良点を抽出するとともに、スタート地区及び選手待機場所を決定した。また、競技前後の選手の動線、監視員の配置箇所等を検討することで、概ねの競技の構想が確定した。

9.4 開催断念に至った経緯

(1) 競技使用可能エリアの縮小

上記試走後、6月下旬の渉外活動において、以下の事実が判明した。

- ・サーカス団体（上記3(1)①参照）の占有延長が決定しており、大会当日も会場に残留する。
- ・同団体の公演場所が選手権スタート地区周辺に変更されており、観客の集中が予想される。
- ・上記の公演箇所のほか、管理車両の通行範囲等についても、競技での使用は不可能である。

本テレインでのコースセットが既に多くの制約のもとに進められていたことは、前述した通りである。これらの制約の突然の追加により、スタート地区及び選手の動線計画が覆されるとともに、現行テレインでの競技性の確保は極めて困難なものとなった。

(2) 代替テレインの検討

(1)を踏まえ、「ろまんちっく村」での大会開催は不可能と判断し、代替テレインでの開催を検討した。概要は以下に示す。

- ・参加者の減少により十分な大会収益が見込めないため、新規地図の作成は経済的に困難である。
- ・栃木県内の主要な既存テレインは、いずれも直近1～2年以内に大会等で使用されており、競技の公平性の確保に疑問が生じる。

このほか、ロング競技会場周辺での開催も模索されたが、スプリント競技として適切なコースセットは極めて困難であること、ロング競技の前日準備スケジュールの大幅な変更を伴うことから、却下となった。

なお、この時点で「那須野が原公園」での開催案も浮上したが、利用客の多い10月の開催は困難であること、開催日程を変更した場合、実行委員会の再構成が必要なことから、やはり却下となった。

以上の議論を経て、「ろまんちっく村」がテレインとしてもはや不適であること、現行のスケジュールと運営体制では代替テレインでの開催も困難であることから、7月18日、大会実行委員会より日本学生オリエンテーリング連盟に対し、大会開催の断念を打診し、承認されるに至った。

9.5 開催断念の要因と今後への提言

(1) テレインの選定プロセス・適性判断

9.2(2)で記した通り、今回のテレイン選定は YMOE 社及び栃木県協会が実行委員会とは独立して行っており、**実行委員会側への連絡は決定後の事後報告であった**。このようなテレイン選定における「天下り式」のプロセスは、昨年度報告書においても問題視されており、この反省が活かされていないことは明らかである。

また、テレイン選定時における「競技性の確保」の視点についても、十分であったとはいえない。**テレイン選定時の YMOE 社からの連絡では、「飛び込み渉外によりその場で即断した」とのことであった**。テレインのレイアウトや使用可能エリア、特徴物の配置状況など、競技性の確保に主眼を置いた現地の確認・吟味はほとんど為されないまま、「開催の可否」のみでテレインが最終決定された。

この結果、準備を進める過程で「ろまんちっく村」のテレインとしての不適性が顕在化したものの、その時点では既に後戻りができない状況に陥っており、開催断念という最悪の判断を下すに至ったものである。

特にスプリント競技においては、**コースの完成度がテレインの特性に大きく左右される**。テレインの選定にあたっては、最新のスプリント競技事情に精通した大会運営者（競技責任者、コースセッター、イベント・アドバイザー等）による現地確認を経て、競技性の確保を考慮した判断が下されるべきである。**実行委員会外からの「天下り式テレイン選定」は近年のインカレ運営で常態化しており、YMOE 社等のワンマン体制による意思決定プロセスこそ、この問題の本質であると考えられる。**

(2) 渉外活動の怠慢

9.4(1)で記した競技使用可能エリアの縮小は、「**ろまんちっく村**」**管理者側に本大会の概要・利用予定範囲等が伝わっていなかったことが要因**である。サーカス団体の予定変更の際に、管理者側が本イベントへの影響は無いものと判断した結果、一部競技エリアとのブッキングが発生するに至った。

9.3(1)で既に述べたように、実行委員会側としては、テレインの制約が多いことが判明した4月時点で、

- ・管理者側と密にコミュニケーションを取り、大会の概要、利用予定範囲を早期に伝えること
- ・万一使用可能範囲が変更になる場合は、早期に情報を得られるよう、管理者側に働きかけておくこと

以上を徹底するよう、渉外担当の YMOE 社及び栃木県協会に度々要請した。これにも関わらず、先述したサーカス団体の予定変更は本大会との調整なしに進められており、実行委員会側が本件を把握したのは全て事後であった。上記2点が徹底されていなかったものと思われる。

本大会に限らず、スプリント競技においては、会場管理者や他団体との調整・合意形成が特に重要である一方、相互のコミュニケーションによってこれらの情報は容易に把握可能である。渉外担当がこの役割を担うべきポジションであることは言うまでもない。

- ・大会デザインの全体像をリアルタイムで把握し、渉外先との調整事項を整理すること
- ・渉外先と密に連絡を取り、相互の懸念事項や調整事項の共有を図ること
- ・責任感を持って臨み、腰を据えて自己の作業の進捗管理ができること

以上を全うできる渉外担当者の選任が、円滑なインカレスプリントの準備に重要であろう。

繰り返しになるが、本大会の開催断念は、COVID-19 感染症の拡大とは別の問題に起因する。不可抗力に要因を求めるのは容易であるが、今後のインカレスプリントの継続的な開催に対しては無意味である。本件を通じて抽出された運営体制・準備プロセスの問題点を踏まえ、今後のインカレスプリント運営が円滑に行われることを期待して、以上を報告する。

選手権の部スタートリスト

・★印はシード選手です。

ME(1/2)		出走者数62	
スタート時刻	氏名	学校・学年	Eカード番号
12:30	羽田拓真	横浜国立大学2	510454
12:31	宮川靖弥	東京工業大学3	507471
12:32	本庄祐一	東京大学2	レンタル
12:33	今野陽一	東北大学3	240420
12:34	太田知也	京都大学4	506233
12:35	伊藤元春	東京大学3	レンタル
12:36	嶋崎渉	東北大学4	236139
12:37	田中琉偉	法政大学3	244602
12:38	伊藤良介	京都大学3	507411
12:39	石崎建	金沢大学4	509880
12:40	宮嶋哲矢	千葉大学4	240110
12:41	菅沼友仁	茨城大学4	239639
12:42	五十嵐央人	金沢大学4	509778
12:43	藺部駿太	東北大学4	235937
12:44	平岡丈	京都大学2	510640
12:45	谷平光一	名古屋大学4	238897
12:46	金子哲士	東北大学4	236043
12:47	高橋英人	一橋大学4	236128
12:48	棚橋一樹	名古屋大学4	502496
12:49	高木一人	北海道大学2	250417
12:50	永山遼真	筑波大学2	506122
12:51	山田基生	東北大学4	236135
12:52	本田明良	静岡大学4	505256
12:53	山内優太	広島大学4	511175
12:54	住吉将英	名古屋大学4	239000
12:55	鈴木京佑	横浜市立大学4	505264
12:56	唐木朋也	東北大学4	236041
12:57	櫻井一樹	東京工業大学4	507480
12:58	小林直登	名古屋大学2	510392
12:59	和佐田祥太郎	京都大学3	レンタル
13:00	倉地草太	北海道大学4	506391
13:01	石渡望	東北大学4	236039
13:02	栗生啓介	名古屋大学3	507355
13:03	清水慎太郎	広島大学4	レンタル
13:04	阿部遼太郎	横浜市立大学3	507533
13:05	池田匠	早稲田大学3	502867
13:06	鈴木琢也	横浜国立大学3	509456
13:07	二俣真	京都大学2	510495
13:08	高橋洸太	東京工業大学4	507478
13:09	丸山ゆう	京都大学4	506242
13:10	野口晃太郎	北海道大学3	506395
13:11	石川創也	名古屋大学4	502497
13:12	根本啓介	筑波大学2	レンタル
13:13	和田佳文	静岡大学3	505257
13:14	古池将樹	京都大学4	506234
13:15	名雪青葉	筑波大学3	レンタル
13:16	保刈優	東北大学4	236044
13:17	小林尚暉	東京大学3	レンタル
13:18	江野弘太郎	慶應義塾大学4	505266
13:19	小寺義伸	東京工業大学4	507479
13:20	片岡佑太	大阪大学4	505105

MEスタートリストは右上に続く

ME(2/2) 左下の続き			
スタート時刻	氏名	学校・学年	Eカード番号
13:21	★朝間玲羽	東京大学3	レンタル
13:22	森倭渡	北海道大学3	506499
13:23	谷野文史	筑波大学4	505190
13:24	清水嘉人	北海道大学3	506392
13:25	豊田健登	茨城大学4	239653
13:26	★小牧弘季	筑波大学4	507742
13:27	伊藤頌太	慶應義塾大学3	507476
13:28	竹下晴山	茨城大学3	506230
13:29	津田卓磨	横浜国立大学4	505311
13:30	祖父江有祐	筑波大学2	レンタル
13:31	★大石洋輔	早稲田大学4	510609

WE		出走者数35	
スタート時刻	氏名	学校・学年	Eカード番号
12:30	須本みずほ	椙山女学園大学3	245058
12:31	松本萌恵	神戸大学2	510331
12:32	土田千聖	名古屋大学3	244546
12:33	大栗由希	茨城大学3	506123
12:34	菊地美里	東北大学2	249305
12:35	近藤花保	名古屋大学2	510352
12:36	松田千果	横浜市立大学4	505211
12:37	阿部悠	実践女子大学3	244709
12:38	明神紀子	聖心女子大学3	244654
12:39	山崎璃果	椙山女学園大学3	245057
12:40	片岡茅悠	東京大学4	レンタル
12:41	藤井春菜	北海道大学2	レンタル
12:42	今井里奈	椙山女学園大学2	510350
12:43	五十嵐羽奏	名古屋大学3	244542
12:44	★小林祐子	東北大学4	236032
12:45	猪股紗如	千葉大学2	511061
12:46	山根萌加	京都大学3	507413
12:47	長瀬麻里子	お茶の水女子大学2	251256
12:48	永山尚佳	神戸大学3	507477
12:49	★香取瑞穂	立教大学4	レンタル
12:50	富永万由	早稲田大学4	507512
12:51	清野幸	横浜国立大学4	505263
12:52	高橋茉莉奈	大阪大学2	510490
12:53	上島じゅ菜	お茶の水女子大学2	251255
12:54	★伊部琴美	名古屋大学4	502491
12:55	岩崎佑美	慶應義塾大学3	507531
12:56	菊池美結	岩手大学3	245717
12:57	秋山美玲	早稲田大学4	507428
12:58	多田明加	金沢大学3	509777
12:59	★世良史佳	立教大学4	236153
13:00	井上千帆里	相模女子大学4	505315
13:01	栗山ももこ	横浜市立大学2	510449
13:02	中神智香	静岡大学3	505255
13:03	八木橋まい	東北大学4	236132
13:04	★宮本和奏	筑波大学4	512387

大会役員

実行委員長	岡崎 良昭 (栃木県協会)	副実行委員長	荻田 育徳 (栃木県協会)
競技責任者	松尾 怜治 (東京14)	競技副責任者	猪俣 祐貴 (東京13)
運営責任者	糸 潤哉 (東京14)	運営副責任者	小泉 知貴 (慶應義塾13)
コースプランナー	橘 孝祐 (横浜国立13)	コースアドバイザー	石澤 俊崇 (早稲田93)
渉外責任者	山川 克則 (栃木県協会)	渉外副責任者	宮川 早穂 (立教12)
広報責任者	桑原 大樹 (東京13)		
会計責任者	堀江 優貴 (東北14)		
人事責任者	瀬川 出 (東京14)		
エントリー責任者	佐藤 俊太郎 (東北14)		
会場チーフ	濱宇津 佑亮 (東京15)		
受付チーフ	木村 史依 (金沢13)		
交通チーフ	平山 遼太 (東京14)		
スタートチーフ	増田 七彩 (東京13)	スタートサブチーフ	原田 龍馬 (東北12)
フィニッシュチーフ	直井 萌香 (筑波13)	フィニッシュサブチーフ	大西 正倫 (東京13)
演出チーフ	中村 茉菜 (早稲田13)		
配信チーフ	小柴 滉平 (筑波12)	配信サブチーフ	坂野 翔哉 (東京理科14)
救護チーフ	香取 菜穂 (千葉15)	救護サブチーフ	井倉 幹大 (東京13)
資材担当	友田 雅大 (早稲田14)		
Web担当	秋山 周平 (大阪13)		
コロナ対策担当	八神 遥介 (東北02)		
大会キャラ作成	増田 七彩 (東京13)		

尾崎 高志 (早稲田01)	瀬尾 峻汰 (京都13)	大竹 達也 (金沢13)
石神 愛海 (実践女子13)	吉澤 佳奈 (日本女子14)	大類 茉美 (フェリス女学院14)
稲垣 善太 (早稲田14)	犬塚 眞太郎 (早稲田13)	針生 佳奈 (宮城学院女子13)
小林 重信 (東北86)	浅井 迅馬 (京都13)	小泉 佳織 (津田塾09)
友田 賢吾 (東京経済18)	北川 賢也 (横浜市立15)	有賀 裕亮 (早稲田14)
伊藤 樹 (横浜国立15)	砂原 和允 (東京工業13)	結城 克哉 (東京09)
山岸 夏希 (筑波15)	前中 脩人 (東京13)	戸谷 みのり (奈良女子15)
田中 大貴 (一橋13)	池 陽平 (北海道02)	保坂 拓香 (宮城学院女子13)
金山 柚佳 (京都女子14)	赤井 章吾 (東北14)	石山 良太 (名古屋13)
中澤 寛典 (名古屋11編入)	八尋 弓枝 (筑波90)	黒羽 和之 (ときわ走林会)
上野 康平 (東京工業15)		

地図調査者 山川 克則 西村 徳真 宮西 優太郎 坂野 翔哉 高野 兼也

イベント・アドバイザー 佐藤 大樹 (東京工業11)

寄附者一覧

本大会の趣旨に賛同いただき、下記の方に寄付金をいただきました。本大会が問題なく成立し終了したのは、下記の方をはじめとするご協力いただいた皆様のおかげです。
深く御礼申し上げます。

青木 健悟	青木 俊之	赤井 秀和	浅野 昭	朝野 椋太
阿部 稜	荒井 正敏	飯野 雅人	池ヶ谷 悦朗	池田 俊彦
池田 博	石井 亘	石塚 脩之	石坪 夕奈	石野 夏幹
出田 裕子	出田 洋	伊東 瑠実子	伊藤 夏生	稲岡 雄介
稲田 旬哉	稲葉 英雄	今泉 知也	伊村 公志	鵜飼 須彦
大野 政男	大野 聡生	大場 隆夫	岡田 泰三	緒方 賢史
奥田 健史	小野田 敦	鹿島 健人	柏樹 芳雄	春日 直也
加藤 弘之	金井 桂一	上島 乃英	河村 健二	河村 尚美
川本 真輝	神戸 鍊一郎	木村 耕平	木村 修	楠 健志
熊谷 光起	栗原 佑典	桑原 大樹	小泉 辰喜	上妻 紅音
小林 岳人	斎藤 康弘	斎藤 早生	坂本 慧	桜井 剛
佐藤 政明	佐藤 繁	実藤 俊太	嶋岡 雅浩	速水 駿
菅谷 裕志	杉村 俊輔	鈴木 紀夫	鈴木 拳直	瀬谷 全那
世良 史佳	弓削田 慎一	高津 寿三鈴	高橋 洋一	竹市 葵
田代 雅之	田中 基成	田中 宏明	田中 創	田中 裕之
田中 翔大	田濃 邦彦	玉木 圭介	近内 京太	築地 孝和
綱 淳壱郎	寺嶋 一樹	寺嶋 貴美江	寺嶋 謙一郎	土井 洋平
外石 裕太郎	豊島 利男	内藤 愉孝	中島 克行	永瀬 真一
中野 航友	中村 憲	西村 和人	西脇 正展	新田見 俊宣
服部 早苗	早川 徹彦	深浦 茂子	福西 佑紀	藤井 範久
藤生 考志	藤本 拓也	細淵 晃平	堀田 遼	本間 実季
前川 一彦	前田 裕太	松浦 知佑	三橋 武史	宮川 祐子
宮本 知江子	武藤 拓王	村上 巧	八重樫 篤矢	安江 将貴
山内 崇弘	山下 政泰	山田 健一	山本 英勝	山本 信彰
山本 陽子	吉澤 雄大	吉田 しのぶ	吉田 勉	渡辺 菜央美
渡辺 円香				

2020年度日本学生オリエンテーリング選手権大会
ロング・ディスタンス競技部門
報告書

発行日：2021年1月18日

発行者：2020年度日本学生オリエンテーリング選手権大会
ロング・ディスタンス競技部門 実行委員会

発行責任者：岡崎 良昭(実行委員長)

編集責任者：桑原 大樹(広報責任者)